

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## An Ethnological and Geographical Study of European Open Air Museums

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 尚次 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004380">https://doi.org/10.15021/00004380</a>

# ヨーロッパの野外博物館

——その民族学的・地理学的研究——

杉 本 尚 次\*

## An Ethnological and Geographical Study of European Open-Air Museums

Hisatsugu SUGIMOTO

Traditional rural houses have been studied by scholars from wide range of disciplines including ethnology, geography and various related fields. From an ethnological and geographical perspective the rural house is an important key to settlement structure. The typical characteristics of the roof types and building materials, house plans, farmstead types show regional differentiation and reflect specific aspects of local ways of life.

As a result of a rapid change in village life, Europe has faced the problem of a complete loss of its traditional folk architecture. Initially, Open-Air Museums were designed to preserve folk architecture and folk culture. The number of Open-Air Museums has grown considerably in the second half of the 20th century.

This paper reports on an ethnological and geographical survey conducted in 1971, 1978 and 1984 (especially 1984) of 57 European Open-Air Museums.

1. Open-Air Museums in Europe (General View)—Historical outline—
2. Various aspects of European Open-Air Museums:
  - (1) Eastern Europe (Romania, Hungary, Czechoslovakia, Poland),
  - (2) Central Europe (Federal Republic of Germany, Switzerland),
  - (3) Western Europe (France, Spain, Ireland),
  - (4) Northern Europe [reference: Bulletin of National Museum of Ethnology Vol. 5 No. 2, 1980].

---

\* 国立民族学博物館第5研究部

3. A Characteristics of European Open-Air Museums  
 (Generalization)  
 (1) Types and Kinds of Open-Air Museums  
 (2) An important key to Open-Air Museum Structure  
 (3) The Conference of European Open-Air Museums  
 (4) Open-Air Museum of Japan

はじめに	Ⅲ. ヨーロッパ野外博物館の特色
Ⅰ. ヨーロッパ野外博物館の概況——歴史的 背景を中心に——	——総括——
Ⅱ. ヨーロッパ野外博物館の諸相	1. 野外博物館の分類
1. 東ヨーロッパ諸国	2. 野外博物館の構成要素
2. 西ドイツ	3. ヨーロッパ野外博物館の連帯
3. スイス・フランス	4. 日本の野外博物館～ヨーロッパとの若 干の比較～
4. スペイン・アイルランド	

## はじめに

野外博物館は、主として伝統的建築物（民家その他）や生活用具類などをセットにして野外に配置展示しており、民家をはじめとする伝統的庶民文化財保存の重要な手段の一つになっている。野外博物館という用語はイギリスの Open-Air Museum、ドイツの Freilichtmuseum、フランスの Musée de Plein Air あるいは Ecomusée に相当する。ポーランドでは、スウェーデンのストックホルムにある世界最初の野外博物館 Skansen の名称をとりいれており、Skansen は東欧諸国では野外博物館を示す用語としてかなり使われている。その他、各国で民俗公園（民族公園）、歴史公園（風土記の丘～日本）などの中に建物を移築したものがある。

ヨーロッパでは、産業革命、人口の都市集中などによる村落生活の変化が、民家をはじめ伝統的建築物の減少を招いているが、2度の世界大戦がこれらの傾向を促進してしまった。近年都市化の進展を軸に、新建材の普及や、構造の画一化が庶民文化財の減少に拍車をかけ、近い将来には完全な消失という問題に直面している。今や野外博物館は、建物としての伝統的住居（民家）と、それをとりまく環境や庶民の伝統的生活文化に接することができる貴重な場となっている。

野外博物館は、北欧からはじまり、ヨーロッパ各地に広がり、ヨーロッパ移民などによる文化的接触を契機にアメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなど新大陸へ波

及し、各国の民族意識の昂揚や伝統文化の保存など、社会教育的要素を背景にアジア（中国、韓国、インドネシア、フィリピン、タイなど）、オセアニア（ハワイ、フィジー）、アフリカ（タンザニア）にも広がった。わが国にも現在20余の野外博物館が誕生している。

筆者は、ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究のため、各国で蓄積されている民家研究の文献資料を渉猟し、研究展望を行った [杉本 1969: 2-20, 1980: 495-506]。現地調査となると、前述したように伝統的民家の激減から、現在では、例えばスウェーデンのダーラナ地方や、ポーランド南部からスロヴァキア北部にかけてのタトラ山地周辺等々特定の地域でしか、その姿に接することができない状況である。幸いヨーロッパ各地には数多くの野外博物館があり、古い民家を移築保存しているので、1971年、1978年、1984年に巡検、調査した57の野外博物館について、民家の地域性や展示の特色を探ろうとする。なお『国立民族学博物館研究報告』5巻2号で、1971年と1978年の調査を基礎に第1次報告を行ったが [杉本 1980: 493-592]、今回の報告は第2報にあたり、1984年に巡検、調査した東欧諸国やスイス、西ドイツ、フランス、スペイン、アイルランドの野外博物館資料が中心となっている。なお最後にヨーロッパ野外博物館の総括を行い、若干わが国の野外博物館に言及する。

## I. ヨーロッパ野外博物館の概況——歴史的背景を中心に——

ヨーロッパの野外博物館は、西ドイツの A. Zippelius の『ヨーロッパの野外博物

表1 ヨーロッパの主要野外博物館数

	国名	野外博物館数		国名	野外博物館数
1	スウェーデン	22	13	西ドイツ	11
2	フィンランド	32	14	東ドイツ	8
3	ノルウェー	27	15	ポーランド	11
4	デンマーク	7	16	チェコスロヴァキア	4
5	アイスランド	1	17	ハンガリー	7
6	ベルギー	1	18	ルーマニア	5
7	オランダ	3	19	ブルガリア	1
8	イギリス	8	20	ユーゴスラヴィア	2
9	アイルランド	1	21	ソ連	19
10	フランス*	4	22	スペイン	2
11	オーストリア	6			
12	スイス**	1		計	183

[ZIPPELIUS 1974] の資料による (一部補充 \* 1984 \*\* 1978)

表2 ヨーロッパの野外博物館数 (1982)

	設立年	1918年 以前	1919～ 1958年	1959年 以降	設 立 年 不 明*	計
	国 名					
1	スウェーデン	31	273	66	792	1,162
2	フィンランド	5	39	24	162	230
3	ノルウェー	50	128	32	104	314
4	デンマーク	4	3		4	11
5	アイスランド		1			1
6	ベルギー		1	1	1	3
7	オランダ	1		2	4	7
8	イギリス		4	8		12
9	アイルランド			2		2
10	フランス			8		8
11	オーストリア		1	17		18
12	スイス			1		1
13	西ドイツ	10	15	50		75
14	東ドイツ	2	1	9		12
15	ポーランド	1	4	32	2	39
16	チェコスロヴァキア		1	19		20
17	ハンガリー		2	17	11	30
18	ルーマニア		2	15	1	18
19	ブルガリア		2	2	1	5
20	ユーゴスラヴィア		2	8		10
21	ソ 連		10	23	28	61
22	ス ペ イ ン		1	1		2
	計	104	490	337	1,110	2,041

\* 建設中のものを含む。 [CZAJKOWSKI 1984] の資料による

館ハンドブック』[ZIPPELIUS 1974]によると、主要なものだけでもヨーロッパ全域で176ある。ハンドブックに記載されていないが、観光的要素の強いスペインのパルセロナの「スペイン村」や、スイスのバレンベルクに1978年開館した国立野外博物館、フランスの Ecomusée などを加えると、22カ国、合計183となる〔表1〕。最近出版されたポーランドの J. Czajkowski の『ヨーロッパの野外博物館』[CZAJKOWSKI 1984]によると総計2,041となっている〔表2〕。このうち、1,110は建設中のものも含むが、大半は創立の年次も不明な小規模地方野外博物館で、各自の民家を夏季に民家博物館として開放するボランティア的なものが多い。しかも1,058は、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドの北欧3国で占められており、総数でも1,706に達し、北欧に集中している。その他、中部ヨーロッパ諸国、東欧諸国、イギリス、フランス、アイルランド、スペインにも分布している。野外博物館の分布を地域的に概観すると、

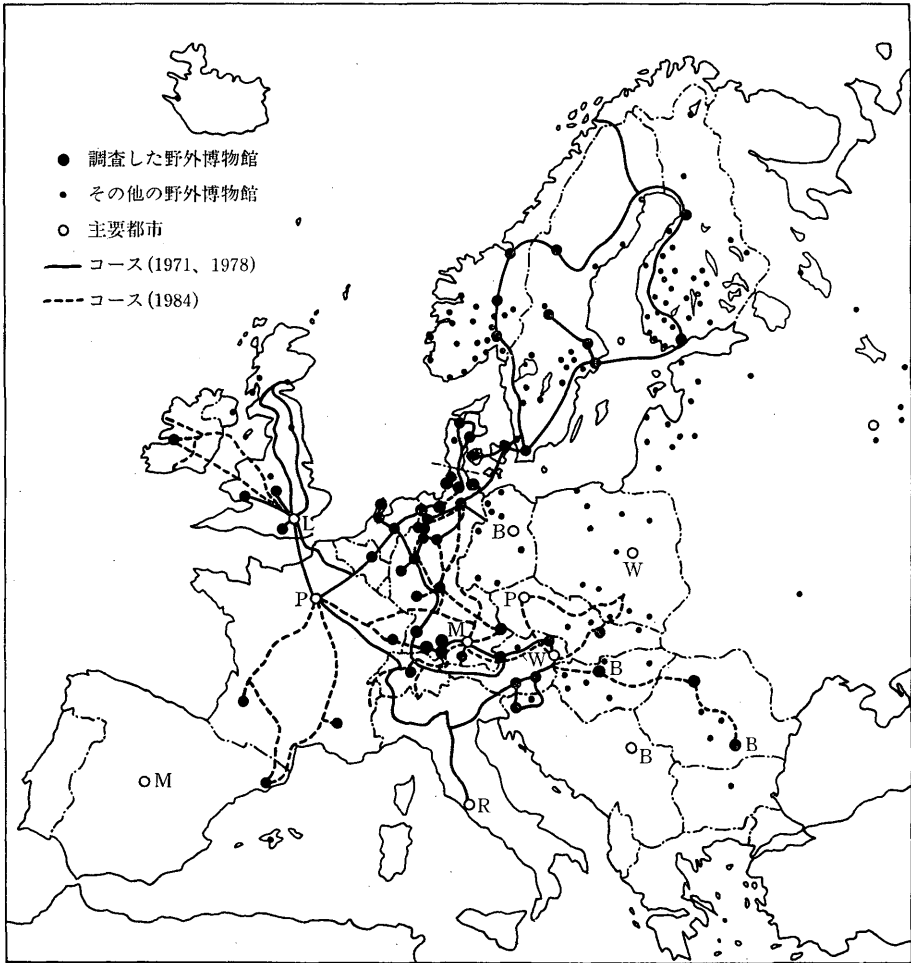


図1 ヨーロッパの野外博物館分布図 ([ZIPPELIUS 1974] の資料により編図)

イタリア、ギリシア、ポルトガル、スペインなど地中海地域の諸国には少ない。これは減少の激しかった木の文化と、耐久性のある石の文化の差や、地中海地域における豊富な文化財の存在も無関係ではないであろう。

世界で最初にオープンした野外博物館は、スウェーデンのストックホルムにある Skansen で、1891年のことであるが、それ以前に、野外博物館建設を示唆する種々の動きがあった。まず、1790年スイス人 Charles de Bonstetten の「諸民族の家族や農場と共に、ラップランドやフェロー諸島やアイスランドの人たちの民家があるような海浜にイギリス風庭園を造る」という、ロマンティックな着想があげられる。実現しなかったが、1793年、彼によってデンマークの Fredensborg 城の庭園に野外博物館

を作る計画があった。これらがある意味では、野外博物館概念の起源ともみられる [CZAJKOWSKI 1981: 12-31]。ノルウェーでは、1841年に J. C. Dahl が Wang 湖地方から中世風の教会を買い、Frederick William IV 世のポツダム庭園に贈ったのが起源とされる。1884年から1888年にかけて中世風の教会と他に数種の建物が国王 Oscar II 世の命令でオスローの Bygdøy 半島へ移されたが、このノルウェーの民俗建築のコレクションが、H. J. Aall によって充実され、1902年ノルウェー民俗博物館として開かれることになる。リレハンメル民俗博物館の創設者 A. Sandvik は、転地療養先で、民俗文化の失われゆく姿を嘆き、1894年にこの地方の古い農家を購入しはじめ、コレクションを整備して1904年に開館している。

オランダでは1883年から1903年にかけて、国際植民地展示のために作ったインドネシア各地域の民家模型が残されたが、これも野外博物館構想に一つの示唆を与えることになった。ポーランドでは1888年に I. Baranowski 教授と実業家の A. Scholtze がタトラ山博物館の隣に典型的な山村民家を建てる計画をした [CZAJKOWSKI 1981: 12-13] のも一種の先駆とみられる。

1873年ウィーン万国博覧会の時に、模型と実物のいくつかの民家による民族村展示が行われたが [ZIPPELIUS 1974: 193-204]、これが伝統文化保存への関心を喚起したともいわれる。

スウェーデンでは A. Hazelius が1872年頃から家具や衣装など物質文化の収集、保存をはじめている。1873年ウィーンを訪れて万博民族村の展示を見学しており、野外博物館構想への刺激を受けたと考えられる。Hazelius は、1878年パリの万国博覧会で伝統的な衣装や農家の室内展示を行ったが、1885年には最初の建物を購入し、野外博物館への準備は本格化し、1891年ジュールゴードン島に Skansen を開館した。スウェーデンでは国王が趣味的に中世家屋の模型を作らせたりすることはあったが、一般大衆に公開する目的をもったものは Skansen が最初といえよう [岡崎・杉本 1978; 杉本 1977: 96-100]。スウェーデン南部にあるルンドの文化史博物館野外展示場も同じ年に開かれている。前記のノルウェー民俗博物館は1902年にオープンしたが、多分にスウェーデンとの対抗意識が背景にあった。

デンマークでは、1878年のパリ万国博覧会で Hazelius と交流した B. Olsen の努力が結実し、1901年コペンハーゲン北郊リングビイにフリーランド・ムセーが開かれた [MICHELSEN 1966: 227-243]。

フィンランドでは1906年ツルクの城庭と、Kemio 島に野外博物館ができたが、これはスウェーデン文化の影響が強いフィンランド西南岸の民族文化を表示することに

なった。1909年フィンランド全域の古民家などを集めたヘルシンキのセウラサーリ野外博物館が開館したが、この背景にはフィンランドが、スウェーデンとロシアに対して独立性を示す国家意識の昂揚が関連していたようである。

Skansen の創設者 Hazelius のモットー「あなた自身を知りなさい」に示されるように、彼の考えは人間的、民族的であり、まず伝統的な建築物を保存することに目標があった。

Czajkowski は、野外博物館の歴史を表2のように①1891(スカンセン創設)–1918年、②1919–1958年、③1959年以降の3期間に分けている [CZAJKOWSKI 1984: 371–381]。最初の期間には104の野外博物館が開設され、そのうち81がスウェーデンとノルウェーにある。他はドイツ、フィンランド、デンマーク、オランダ、ポーランドに散在している。北欧に集中しつつも、第1次大戦までに野外博物館の構想はヨーロッパ中に広がった。以上のようにヨーロッパの野外博物館は北欧からスタートしているが、極初期の野外博物館は、創設が特定個人の努力によって推進されたことが特色となっている。この方式も次第に地域連合や都市あるいは国家などによる運営へと移って行く。北欧諸国が野外博物館のパイオニアとなった背景としては、北欧諸国における19世紀の愛国的ロマン主義による民族意識の昂揚と、民族(民俗)文化が国民文化といえるような状況にあったことがあげられよう。

第1次大戦は新しい野外博物館の発展を抑えたが、大戦後に形成されたヨーロッパ新政治地図によって国家的、地域的なまとまりが強化され、北欧諸国はもとより、オーストリア、チェコスロヴァキア、ラトヴィア、ソ連、ルーマニア、ハンガリー、イギリス、ドイツなど各国で野外博物館の建設が進められた。とくに1936年開館のルーマニアの首都ブクレシュチの村落博物館 (Muzeul Satului) は、建物数においてヨーロッパ最大のものとなった。

第2次大戦では、ルーマニア、トランシルヴァニアの Cluj のように戦火が及び破壊されたものもあったが、戦後、失われゆく伝統的民族(民俗)文化財の保存運動の向上もあって、各国で多くの野外博物館が開設され、ヨーロッパ22カ国に広がっていた。

ヨーロッパ野外博物館の諸問題は、1956年ジュネーブで開かれたユネスコの ICOM (国際博物館会議) ではじめて取りあげられ、1972年にはヨーロッパ野外博物館連合の創立という、国際的な討議の場へと広がることになった。



## Ⅱ. ヨーロッパ野外博物館の諸相

巡検調査したヨーロッパの野外博物館57の中から、1984年に調査した20余を選び、移築建物（主として民家）の地域性や展示の特色を検討する。

### 1. 東ヨーロッパ諸国

東ヨーロッパ地域の民家研究については、1970年以降、地域別の調査研究やその集大成が行われはじめた。V. Mencl のチェコスロヴァキア全域の民家研究の総括が出版されたし [MENCL 1980]、ポーランドの Czajkowski らを中心とした民家研究と野外博物館の充実など [CZAJKOWSKI 1981] 新しい研究動向として注目される。わ

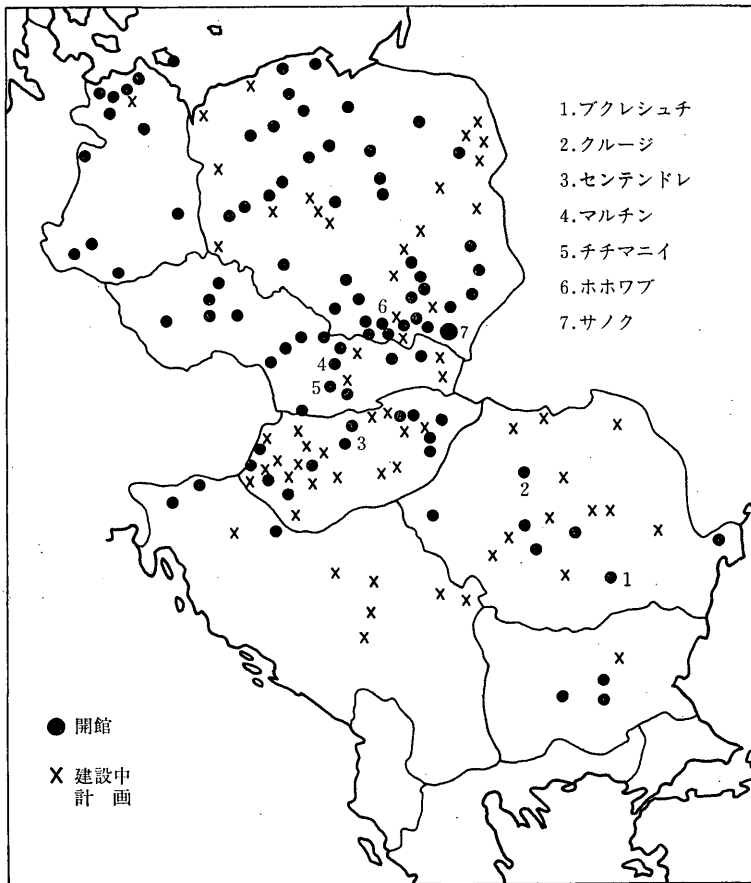


図2 東欧野外博物館分布図

が国では、建築学者の太田邦夫ら研究グループが、1974年以来、カルパチア山地やバルカン半島など東ヨーロッパ諸地域のフィールドワークを行い、民家木造架構技術の研究を続けている【太田・浅井(他) 1977: 189-203, 1978: 13-22】。最近まとまった『ヨーロッパの木造建築』はその集大成であり【太田 1985】、とくに住居とそれを囲む自然や社会環境、歴史的背景との関連を重視しつつ、住居を重要な文化的現象として系統的に捉えようとする姿勢は高く評価される。

東欧諸国やソ連など社会主義国でも、野外博物館の建設が進んでいる。伝統的庶民文化財を保存し、社会教育の場として、或いは観光資源として活用するため、近年その拡充がめざましい。

## 1.1 ルーマニア

### 1.1.1 ブクレシュチ村落博物館 [Museul Satului]

首都ブクレシュチの村落博物館は、ルーマニアを代表する野外博物館である。1925～35年、ブクレシュチ大学の社会学者 D. Gusti をリーダーとして、ルーマニア各地の40以上の村落の民俗建築や民具などの調査が行われた。これらが基礎となって、ブクレシュチ北郊ヘラストラウ湖畔のスロープ 4～5 ha の敷地に、各地の代表的な民家や木造教会など27棟余が集められ、1936年にオープンしている。その後、G. Focşa 館長らの努力によって1948年に 10 ha と拡充し、移築建物も 265棟、ヨーロッパ最大数となった。

建物は主として17世紀から20世紀初頭までのもので、農家などは40余を屋敷単位に主屋と付属建物をセットにして配置してある。農家は木造組積造り(校倉造り)や土壁で草葺または柿葺屋根が多い。付属建物として家畜舎、納屋、穀倉、乾草小屋などがある。その他木造教会や鐘楼、十字架堂など宗教関係の建物。風車、水車。鍛冶屋、陶器工房、製粉小屋、搾油小屋、晒布工場、碎鋸機場、羊毛梳小屋など農村工業に関する建物も多い。

湖畔の緩やかなスロープという優れた環境だが、面積(10 ha)に比べて建物数が多く、やや建てこんだ感じになっている。

カルパチア山地(東カルパチア、トランシルヴァニアアルプス)、トランシルヴァニア地方、Wallachia 平原、Moldavia 地方、ドナウ下流の Dobrogea 地方など、ほぼ地域別に配置している。25,000点の生活用具類などが各民家内部に展示してある。家によっては、過密に陳列しているものもあるが、生活のある姿を再現しようとしている。2～3の事例を示す。

トランシルヴァニア地方北部、民芸の宝庫といわれる Maramures 地方の民家。

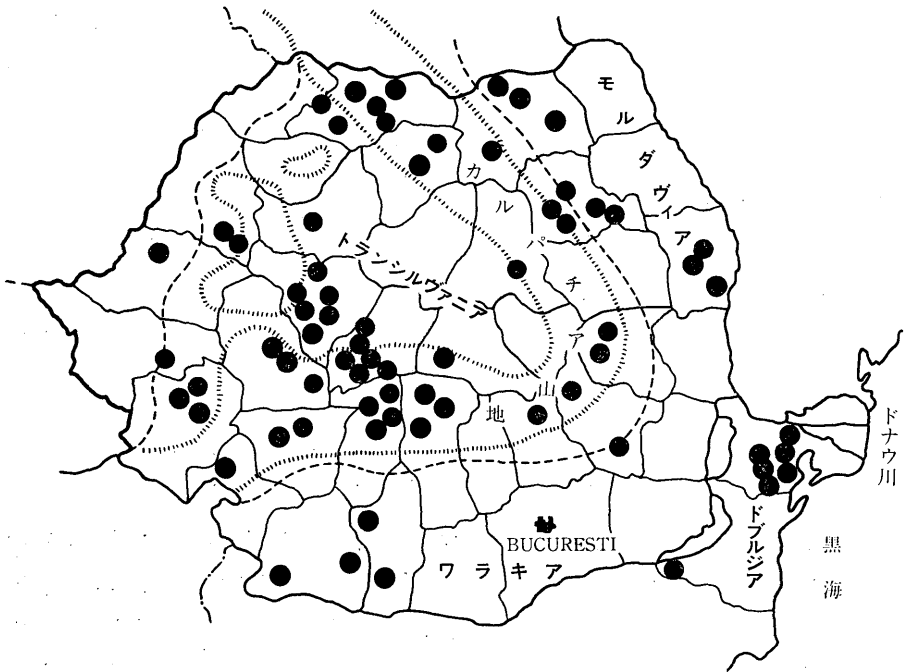


図3 ブクレシュチ村落博物館，移築建物原地分布図

主屋は草葺や柿葺（削ぎ板葺），寄棟型で $50^{\circ}$ — $60^{\circ}$ の急勾配屋根。柏材を使った組積造り（校倉造り）の壁面で，家屋の前面から側面にかけてアーチ式の柱廊がついている。間取りは中央に玄関ホール，左右に居間と寝室（倉庫）の3室形式が多い。居間には

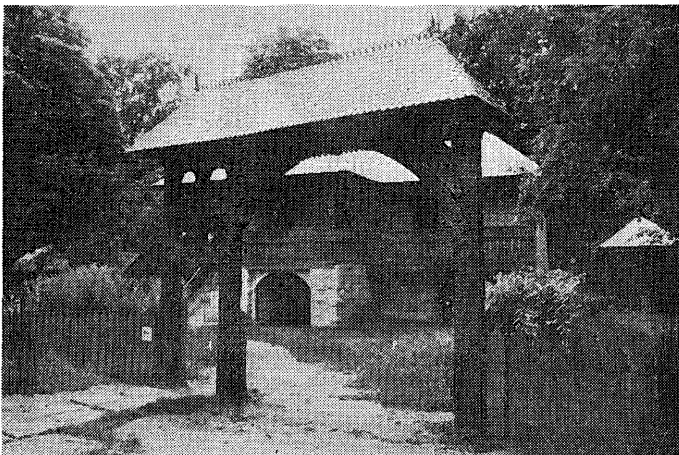


写真1 カルパチア山地南部の民家と特有の門（縄目など種々の浮彫がある）  
【ブクレシュチ村落博物館】

暖炉があり、織物や食器、壺、バターづくり桶等々生活用具類が豊富に展示してある。暖炉の形式も地域によって多様性がある。美しい刺しゅうのベッドカバーや枕を積みあげたものが多い。ガラス絵のアイコンなどを陳列している民家もある。

Maramures 地方の Berbești から移した民家は、屋敷を小屋根つきの低い垣が囲む。門がすばらしく、門柱には縄目や柏の木の葉、太陽と月など種々の浮き彫りを施している。これらが組み合わさって生命の樹を象徴しているという [野村 1979: 15-17]。付属建物として柿葺寄棟屋根の納屋と穀倉、4本柱の方形屋根の乾草小屋、特異な形態の柳の枝を編んだ、とうもろこし貯蔵庫がある。伝統的な農村生活がよく判るようなセット展示にしてある。

ヘラストラウ湖畔には水車、搾油小屋や、黒海に近い Dobrogea 地方ドナウデルタ地帯の風車3基と漁場小屋が並ぶ。同地方の漁家(19世紀)は瓦葺で低く、漆喰塗の壁で、前面はバルコニー風になっている。家屋内部は、居間に暖炉があり、玄関口に炉(焚口)がある。低い台座のベッドや壁には美しいカーペットが敷きつめてある。Moldavia 地方の民家は野外博物館の北寄りの地区に集めてある。寄棟草葺または柿葺屋根で、塗り壁の民家が多い。

ルーマニアの伝統的民家は、カルパチア山地では木造校倉造りが優占しているが、Moldavia, Wallachia 平原から東方ウクライナにかけて塗り壁、日乾レンガの壁が多くなり、スラブ文化の影響圏に入るようである。

博物館では曜日によって陶器、刺しゅう、機織り、搾油などの作業実演や、民俗音楽の演奏も行われている。主売店は入場門(管理棟)にあって、ルーマニア各地の民族誌や、建物の移築前地を示す分布図や間取図の入った詳しいガイドブック(英、仏、独、ルーマニア語別)、リーフレット、絵葉書類も完備している。ヨーロッパでも屈

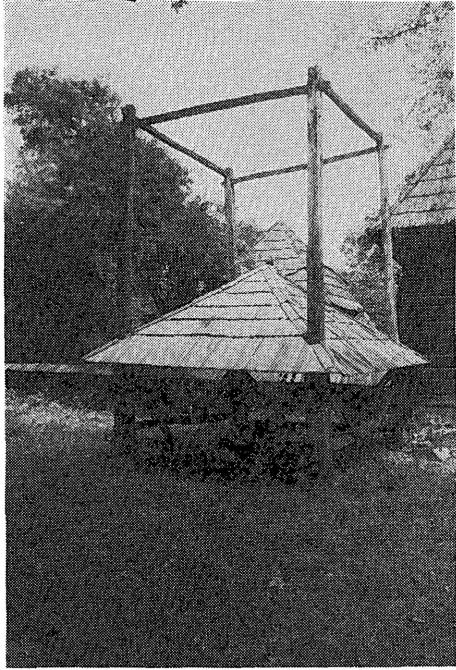


写真2 4本柱で支えた方形柿葺屋根の乾草小屋、乾草の量によって屋根を上下できる(Maramures 地方)  
[ブクレシュチ村落博物館]

指の充実した野外博物館であり、ルーマニア全土の伝統的庶民文化を展望できる首都ブクレシュチ観光ルート的一大拠点になっている [Negoiță (ed.) 1983]。

1.1.2. トランシルヴァニア民族(民俗)博物館野外展示場 [Muzeul etnografic al Transilvaniei, Secția în aer liber]

トランシルヴァニア地方の中心都市 Cluj Napoca にあるトランシルヴァニア民族(民俗)博物館は、同地方の農具、織機、民俗衣装など民俗文化財を、実物と分布図を中心に系統的に展示している、まとまった博物館である。同博物館の野外展示場(野外博物館)は、Cluj の町を出はずれた丘陵の緩斜面 (15 ha) に立地している。1929年民俗公園として Alba 地方の Vidra 村から最初の民家に移され、建物数も増加したが、1944年、戦争で大半焼失した。本格的な民家の移築復元は第2次大戦後である。現在トランシルヴァニア地方の各地域の代表的な民家など50棟近くが集まっている。2部分にわかれ、敷地の1/3のスペースが農村伝統工業関係のセクションで、製材所、毛織物工場、砕石工場、石工の家、陶器工房、鍛冶屋、製粉、ぶどう搾り小屋、搾油小屋、水車などがある。陶器工房になっている民家はトランシルヴァニアでも、ハンガリー平原に近い Bihor 地方のもので、藁葺寄棟で塗り壁になっている。農村家屋のセクションは、Maramures をはじめトランシルヴァニア各地の藁葺、柿葺、瓦葺の民家が、付属建物と共に屋敷単位に展示してある。室内は2-3室形式で、炉、暖炉、地方色豊かな刺しゅう入りの枕やテーブルクロス、糸車、ゆりかご、調理道具など生活用具類が豊富に陳列してある。

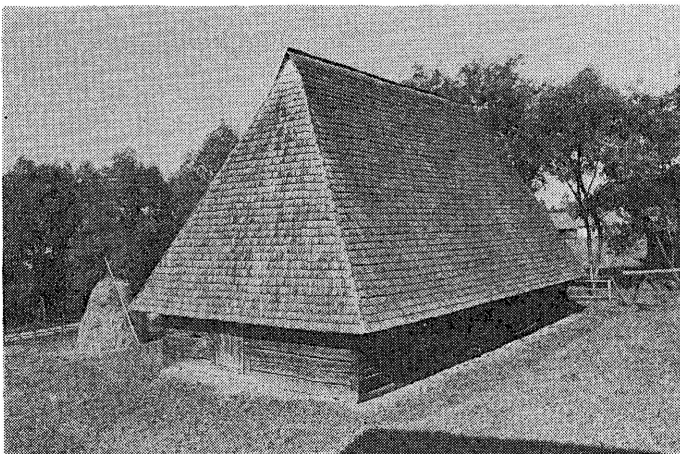


写真3 急勾配の柿葺寄棟屋根校倉造りの壁面をもつ Maramures 地方の民家  
【トランシルヴァニア民俗博物館野外展示場】



写真4 トランシルヴァニア地方の民家の内部（居間兼寝室、刺しゅう入りの枕、イコン、家具類の展示）  
〔トランシルヴァニア民俗博物館野外展示場〕

カルパチア山地が東から南をとり囲むトランシルヴァニア地方は、歴史的に西方ドナウ流域を通じてゲルマン文化の影響がある。地域差はあるが、民家でも塗り壁、日乾レンガ、焼成レンガ壁が多くなっている。これは森林資源の減少から、ハプスブルク家による純粋木造の禁止などもあって Maramures 地方を除いて木造民家が激減したといわれる [太田 1985: 121-124]。

Braşov から移した古民家は中庭を建物が囲む形をとっているが、ドイツ移民の多い地域だけに、その影響が考えられよう。

民家の他に村の十字架堂、集会所、尖塔をもつ18世紀の木造教会3棟などが野外博物館の景観に変化を与えている。農村セクションに近く SL を展示する計画がある。

ブクレシュチの村落博物館は、ナショナルレヴェルの野外博物館だが、ここは優秀な大地域（多地域）野外博物館といえる。

ルーマニアには、他に Sibiu にある伝統的農村工業関係の建物を集めた野外博物館 (Muzeul tehnicii populare din Dumbrava Sibiului)。Timoşoara や Goleşti の野外博物館はぶどう栽培とぶどう酒醸造関係の建物を主にしているし、Tulcea の漁業関係の資料を集めた野外博物館などユニークなものが多い。

## 1.2 ハンガリー

### 1.2.1. ハンガリー野外民族（民俗）博物館 [Szabadtéri Néprajzi Múzeum, Szentendre]

ブダペストの北郊 20 km にある衛星都市 Szentendre の市街地を少しはなれた、

小山をふくむ緩やかな丘陵地帯 (47 ha) に位置している。ハンガリーでも Skansen という名称を野外博物館の標示に使用している。

1966年ブダペストのハンガリー国立民族博物館で計画が進められ、野外展示部門として1972年に独立しているが、一般公開は1974年。1977年にハンガリー東北部の Tisza 川上流地方の家屋敷の移築復元が完了し、実質的開館となった。現在完成している Tisza 川上流地域は、集落の復元という形をとっている。村の広場に木造柿葺の印象的な中世様式の鐘楼と、柿葺屋根、白壁の教会があり [図4, 5-1, 5-2], 道路に沿って居住棟が妻側を向けて並ぶ配置をとっている。したがって屋敷地割も道路沿いに比べて奥行が深く、主として主屋の背後に納屋、家畜舎などが並ぶ建物配置になっている。このように主屋と付属建物をセットにした屋敷4つで構成し、集落ごと再構成したような形になっている。この集落形態は、エルベ川以东の東部ドイツに多い街村の影響が強いといわれ、ハンガリー東部、ルーマニア (トランシルヴァニア)、チェコスロヴァキア、ポーランド南部にもみられる。

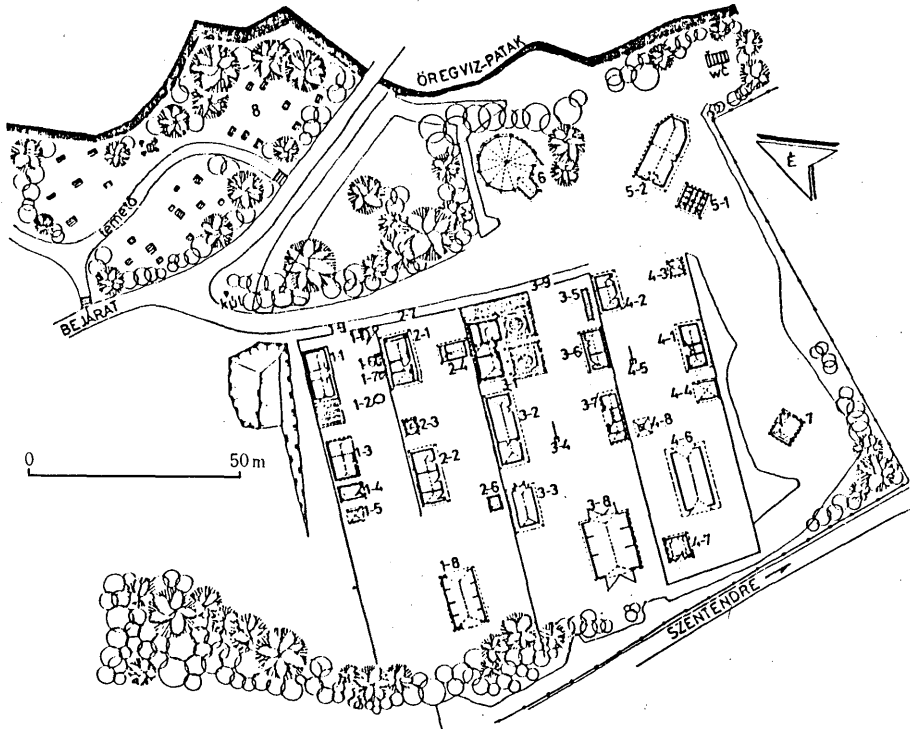


図4 センテンドレ野外博物館 (ティサ川上流域の民家と村落配置図)  
[KECSKÉS 1980] 原図による

事例として2つの屋敷をとりあげる。

(1) Kispalád の民家〔図4, 屋敷1〕で, 草葺(麦稈か茅)寄棟屋根, はりえにしだ, ヘーゼルナッツの枝を編んだ壁下地に白漆喰で仕上げた厚ぼったい土壁 [Kecskés (ed.) 1980]。間取りは3室構成で, 中央に入口と炉のある台所があり, ここから各部屋に入る。主屋の他に草葺で土壁の家畜小屋, 草葺日乾レンガ壁の木小屋(農具など), 4本柱の乾草小屋(軽い方形の草屋根で, 積みあげる乾草, ワラなどの量によって屋根を木柱でとめながら上下できる。ハンガリーからルーマニアのトランシルヴァニアに分布), 柳の枝で編んだ風通しのよい壁をもつ揚げ床式のとうもろこし貯蔵庫と鶏小屋, 円形プランの豚小屋, ハネツルベ式井戸(共同井戸)がある。屋敷は小枝などを網代に編んだ垣で囲まれ, 開閉式の門は梁材を用いた地方色豊かな形式のものである。屋敷地の奥に大型草葺屋根の共同納屋兼作業場が建っている。

(2) Botpalád の民家〔図4, 屋敷2〕。同じく主屋は草葺寄棟屋根で, 道路に面した妻側は小屋裏へ収穫物を搬入するため切りあげてある。白漆喰仕上げの土壁。ハンガリーをはじめドナウ流域の農家には白漆喰仕上げが多いが, これは地中海の白い壁の世界に憧れて白漆喰の上塗りが広がったといわれている [太田 1985: 88-127]。建物前面と道路妻側にかけて柱が柱廊状に並び, 柱に彫刻がある。ハンガリー民家の特色の一つで, 前記のトランシルヴァニア民家にも影響が及んでいる。間取りは3室形式で, 中央の入口を入ったところに大きな炉があり, 室内から各隣室に通じる。道路側は建物の半分を占める大きな部屋で [宮崎 1984: 42-58], 暖炉があるベストルーム。背の部分がヴァイオリン形になった椅子, テーブル, 木箱, 刺しゅう入りのテ



写真5 ハンガリー, ティサ川上流, Botpalád の民家(土壁, 柱廊がつく)  
[センテンドレ野外博物館]



ーブルクロスやベッドカバー、自家製亜麻布、食器類等々、生活用具類がりのままの姿で展示してある。主屋の向い側に柿葺寄棟屋根のとうもろこし貯蔵庫、主屋の奥に豚小屋、家畜舎(馬4頭)、4本柱で可動式方形柿葺屋根をもつ乾草小屋があり、道路沿いには、板を柱の溝におとした板垣を作っている。

村落の北側広場近くに柿葺の大型円錐形屋根の製粉所の建物がある。Vámosoroszi村から移したもので馬に牽かせる形式である。村の北側の木立の中に墓地が復元しており、1.8 m くらいのカシの木の墓標が立っている。

現在整備中だが、他の地域については計画中で、ハンガリー全土の民家を集め、10地域別に配置し、完成時には250棟余になる。ハンガリーを代表する大野外博物館が誕生することになる。主として18—19世紀のハンガリーの民家や民具など物質文化を展示し、ハンガリーの庶民の伝統文化と生活様式を明らかにしようとしている。

ハンガリーには、東北部の Nyiregyháza、西部の Szombathely、バラトン湖西方の Zalaegerszeg、西南部の Szenna など各地に充実した地域野外博物館があり、伝統的庶民文化の保存と活用に努力している。

### 1.3 チェコスロヴァキア

チェコスロヴァキアは、ボヘミア、モラヴィア、スロヴァキア各地に計20近い野外博物館が開設あるいは建設中である。

#### 1.3.1 スロヴァキア国立博物館民俗建築博物館 (Múzeum Slovenskej Dediny/ Museum für Volksarchitektur am Slowakischen Nationalmuseum)

スロヴァキア西北部の小都市 Martin 郊外、カラマツ林のある広々とした丘陵地帯(100 ha)に1967年創設された。現在(1984年)スロヴァキア各地の民家が移築されはじめている。事務所付近の仮小屋には解体した建築部材が山積みされ、復元中の建物もあり、まさに建設整備中である。現在 Orava, Liptov, Turiec など3地方の民家約50棟が集まり、付属建物も含めて集落復元的な配置を進めている。民家の事例を示す。スロヴァキア最北部 Orava 川流域 Veličnej 村付近から移した民家(1748年建築)は、柿葺で妻側を切りおとした甲造り状の屋根や、切妻の下側につけた妻庇が大きくなった破風の大きな入母屋風の屋根で、いずれも妻側破風の上端に円錐を半割にしたククラとよぶ地方色豊かな小庇(飾り)がついている〔写真6〕。屋根裏の換気口のようにみえるが、底板が打ってある。教会のない山村で人々に急を告げる鐘を吊したところからこの形態が生まれたとする説がある [太田 1985: 48—87]。

壁面は校倉造りで表面を石灰汁で白く塗ってある。前方は主棟、後方は家畜舎になっている。妻側の壁に朝日型の装飾をもつ民家もある。校倉の隙間を苔で充填してい



写真6 スロヴァキア、Orava 地方の民家（柿葺、特異な屋根、妻側上端の円錐半割状の小庇がこの地方の特色）  
[マルチン野外博物館]

る家もみられる。間取りは、炉のある主室（居間）、玄関ホール（奥は貯蔵庫）、小部屋の3室形式が多く [川島 1985: 61-66]、ベッド、美しい刺しゅうのある枕が積み重ねてあり、調理用具、食器棚など使っていた当時のままに配置する生活復元展示になっている。居間はスモークルームで、小煙出しが屋根についている。

この野外博物館は、完成時には210棟を予定している。スロヴァキアを代表する伝統的庶民文化のセンターが生まれることになる。

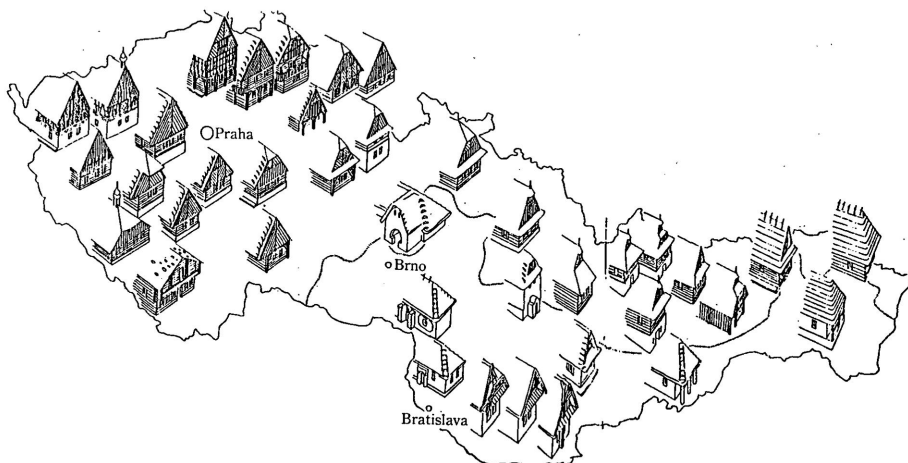


図5 チェコスロヴァキア妻壁の形態分布図  
[MENCL 1980] による

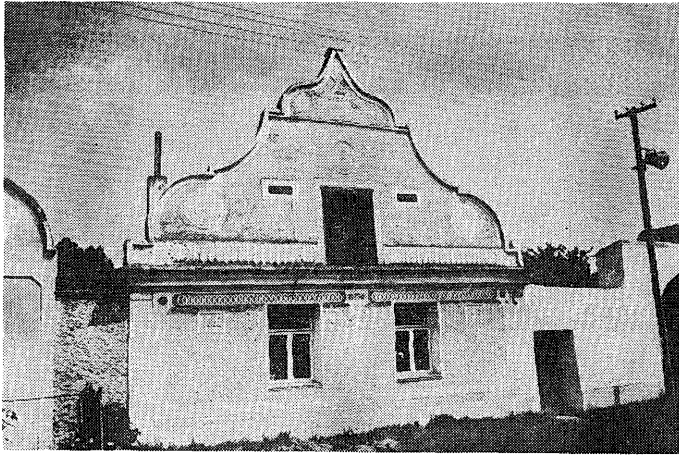


写真7 南ボヘミア農村にみられるバロック風の妻壁飾り（プラストヴィス村）

Mencl が作成したチェコスロヴァキアの伝統的民家の屋根型や妻壁の形態分布図〔図5〕によると、スロヴァキア地方は屋根型にも多様性がある。スロヴァキア東部山地は藁葺寄棟の急勾配屋根で校倉の壁。Tisza 川の支流域になる東南部の平地は土壁で細長い平面の寄棟屋根が多い。寄棟系の屋根型はスラブ様式の流れといわれる。ボヘミアにはドイツの影響とみられる急勾配の切妻屋根が多く、ボヘミア北部やモラヴィア北部では豎板状の切妻壁をみせ、独自に2階の床を支える柱を立てる形式が分布している。ドイツの半木軸組（Fachwerk）の流れと考えられる。スロヴァキア南部の土壁（白漆喰）民家などはハンガリーの影響であろう。なお、南ボヘミアの農村では、民家の妻壁のバロック様式の壁飾りが特色だが、南ボヘミア地方は19世紀には出稼ぎが盛んな地域であった。ウィーンでバロックスタイルの建物をみて帰郷後採用したものが広がったといわれる。新しい文化伝播の一つのケースといえよう。

チェコスロヴァキアにおける屋根型や妻壁の形態の多様性は、巨視的にはスラブ、ゲルマン両文化の接触地帯に生じた地域的な特色とみてよい。地理学者の J. Gottmann が、チェコスロヴァキアとポーランド地域の性格を、スラブとゲルマンの間にある Bufferland, Tidalland と表現したが [GOTTMANN 1953: 397-419], 民家諸型式にもこの特性が表れているようである。

### 1.3.2 校倉造りの村チチマニイ [Čičmany] : 現地保存型

チチマニイ村は、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァを通り、ドナウに注ぐ Váh 川の河谷平野を北上した、タトラ山地の南縁部にあたる Inovec 山地の山間部に位置している。街道に沿って妻側を向けた木造校倉造りの民家が50棟近く並んで街村状を

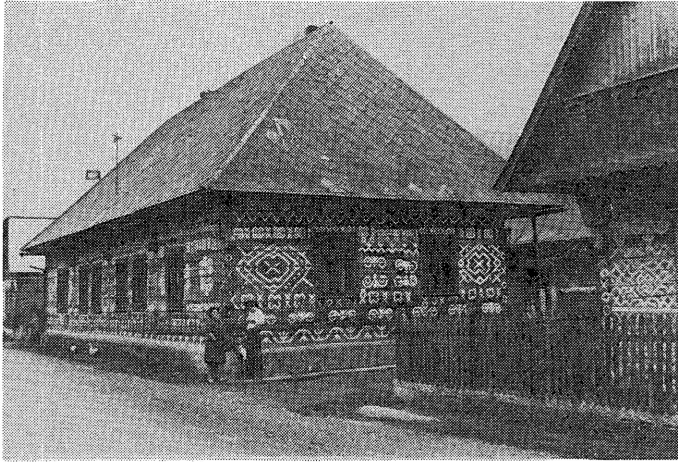


写真8 校倉造りの村チチマニイ、壁面の素朴な装飾

なしている。柿葺やトタン、スレート葺の屋根が混在しているが、以前は全部柿葺だったらしい[川島 1985: 67-72; 杉本 1985b: 86-93]。屋根型は切妻、寄棟、破風の大きな入母屋風、妻側を切りおとした甲<sup>かぶと</sup>屋根まで多様である。階上部は堅板貼りが多く、窓は二重窓になっている。チチマニイ民家の大きな特色は、外壁の素朴な装飾である。校倉の木肌はほとんど100年以上年数を経ているといわれ、全体に黒ずんでいるが、この木肌の表面に白い石灰汁を塗って、丸や三角、×印、ハート型などさまざまな模様が描かれている。手づくりの素朴さが感じられる。この装飾に関する民族学的な解明は進んでいない。

間取りは3室形式が多く、中央に入口（玄関ホール）、道路側にストーブのある居間があり、片方は寝室になっている。居間のストーブには古い型は煙突がなく、煙を室内に充満させて暖をとるスモーク・ルームであった。村のほぼ中央に大型2階建の校倉民家があり、民俗資料館になっている。民俗衣装や農具、祭りの仮装用具、生活用具類などを展示している。1階の間取りは一般的な横並び3室だが、大型で、寝室は2つある。2階はホールを挟んで4室あり、バルコニーがついている。室内は校倉の壁面、木製の家具調度など木の香りが漂っているようである。10年前はほとんど全村校倉造りの古民家であったが、近年急速に減りはじめた。現在は保存策が講じられ、見事な校倉造りの景観を保持している。村ぐるみ保存した生きた野外博物館の好例といえる。

チェコスロヴァキアでは、校倉造りは、スロヴァキア中央部の Váh 川流域山地や、Hron 川流域の山間部、スロヴァキア北部のタトラ山地に残っているが、チチマ

ニイ村のような保存対策が必要となってきた。

#### 1.4 ポーランド

ポーランドには39の野外博物館があり、そのうち、村ぐるみおよびその一部分を現地で保存している (in situ) ものは7ある。計画中的のものも20近くある [MIDURA 1981: 32-55]。

野外博物館は全国に分布しているが、南部のカルパチア山地帯に比較的多く集まっている。ポーランドでは野外博物館や民族(民俗)公園 (Ethnographic Park) を通常 Skansen と称している。

##### 1.4.1 サノク民俗建築博物館 [Muzeum Budownictwa Ludwego W Sanoku]

ポーランドを代表する野外博物館は、ポーランド東南部、カルパチア山地に近いサノクにある民俗建築博物館である。

樹々におおわれた緩やかな丘陵地形の敷地 (17 ha, 完成時 38 ha) に32棟の農家(うち8棟計画中)、家畜舎、納屋、穀倉、4本柱の可動式屋根をもつ乾草小屋など農家の付属建物。風車、水車と陶器工房、鍛冶屋、搾油小屋、製材所など農村工業関係の建物、古い木造教会、鐘楼、十字架祠など宗教関係の建物、村の学校、石橋など総計103件が集まっている [CZAJKOWSKI and OLSZAŃSKI 1981: 94-116]。農家は柿葺、草葺(段々葺)で寄棟屋根が多い。壁面は校倉造りが大半で素地のままのもの。他、白塗りのものもある。これらはポーランド東南部ビスワ川支流の San 川上流域 Rzeszów の東部や、南部サノク付近からカルパチア山地にかけての地域から移築され、地区別に5つのセクションになっている。なお地方町など2つのセクションが計画中である。1968年に開館した新しい野外博物館だが、館長の Czajkowski 博士をリーダーとする研究陣が充実しており、ポーランドの他の野外博物館にも多くの影響を与えている。年2回定期雑誌を発行したり、年報論文集“acta scansenologica”や特別出版物もあり、ヨーロッパ野外博物館連合の国際会議 [SANOK FOLK ARCHITECTURE MUSEUM 1978]、やシンポジウムの開催、Czajkowski 博士自身『ヨーロッパの野外博物館』をまとめる [CZAJKOWSKI 1984] など、その活動には注目すべきものがある。

##### 1.4.2 ホホワヴ村 (Chochółów)——現地保存型の事例——

ポーランド南部、ポドハレ地方はチェコスロヴァキアとの国境にまたがるタトラ山地の北側にあたり、標高 800~1000 m の高原状地形が続く。ポーランドでは伝統的な木造校倉造り民家が現存する貴重な地域である。ホホワヴ村は景観保存地区で、街道に沿って数十戸の校倉造り民家が妻側を向けて並ぶ見事な村落景観である。集落形

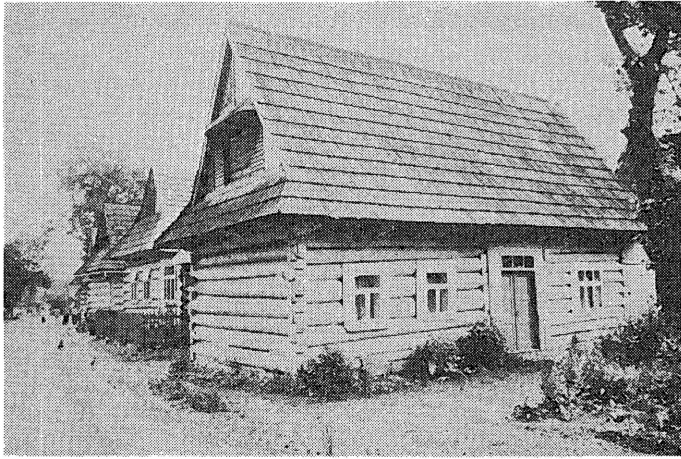


写真9 現地保存型、校倉造りの村ホホワヴ（ポーランド南部ポドハレ地方）



写真10 ホホワヴ村：民家の居間、校倉の壁面は平らに削ってある。宗教画などが飾られ美しく整頓してある

態は街村型であり、エルベ川以東に多い形態である。屋根は急勾配の柿葺が多く、妻（破風）の飾りは朝日型のモチーフや縦板貼りなど多様。壁面はチチマニイなどタトラ山地南麓のスロヴァキア側と比べると材径が大きく、直径 30 cm 前後の角材や丸太の校倉造りで、縄や苔で隙間を埋めてあり、太い材は直径 60 cm 近いものまである [太田 1980: 66-73]。間取りは、入口ホールを挟んで居間と寝室の 3 室構成が基本で、室内の太い丸太の壁面は平らに削ってある。

ポーランドでは18世紀以降木材資源の減少から、純粋の木造建築は、現在では良質の針葉樹材を産するポドハレ地方を除いて禁止されている。ホホワヴ村は現地保存型

の生きた野外博物館であり、近くにある保養観光地ザコパネへの観光ルートの一環としても注目されている。ザコパネの西にある Istebna も校倉造りの多い村落だったが、近年観光地化が進み急減したため、保存の対象からはずれている。

## 2. 西 ド イ ツ

現在西ドイツには75の野外博物館がある。西ドイツについては1971年以来22の野外博物館を巡検調査した。今回報告する1984年調査のものは、Schleswig-Holstein 州立野外博物館と Hessen Park 州立野外博物館を除き、規模の比較的小さい地方野外博物館が多い。西ドイツには国を代表する中央的野外博物館はないが、各州の独立性が強く、コンメルン(ラインラント)、デトモルト(ウエストファーレン)など各州に、州内諸地域の代表的民俗建築を集めた優秀な野外博物館をもっている [杉本 1980: 531-549]。

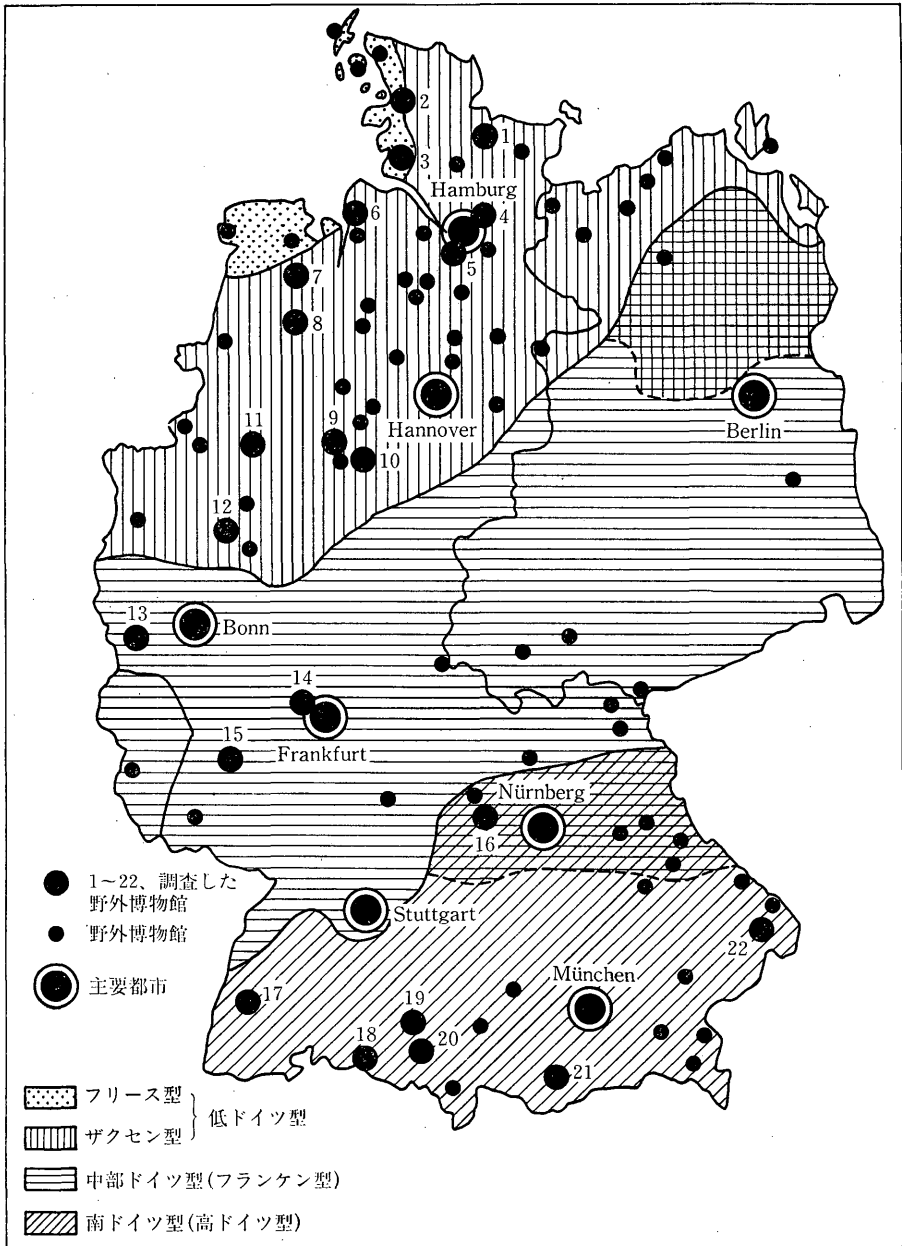
調査した西ドイツの野外博物館(下線, 1984年)の民家についてみると、

(1) Kiel, Husum, Meldorf, Harburg, Hamburg, Bremenhafen, Bad Zwischenahn, Cloppenburg, Münster, Bielefeld, Detmold の野外博物館の場合、それぞれ地方色はあるが、北ドイツ特有の単一家屋(平屋)であるザクセン型(一部フリース型)を主としている。

(2) Kommern のライン州野外博物館、Rheinland-Pfalz 州の Sobernheim, Hessen 州立の Hessen Park は中部ドイツに分布する木組の美しい半木軸組(Fachwerk)の民家が多く、閉鎖型の屋敷建物配置が特徴的である。バイエルン州北部の Bad Windsheim の野外博物館民家は半木軸組を主とした中部ドイツ型が多い。

(3) 南西ドイツ Baden-Württemberg 州 Gutach のシュヴァルツヴァルト野外博物館の民家は広義の南ドイツ(高ドイツ)型だが、飛驒白川郷の合掌造りに匹敵する巨大な単一家屋階層型(3-4層)である。Krünbach と Wolfegg の野外博物館は上シュヴァーベン地方の民家を集めてあり、シュヴァルツヴァルト系と中部ドイツ、南ドイツのタイプが混在し、交界地域的な特色が民家に表れている。

(4) バイエルン州南部の Grossweil にある高バイエルン野外博物館や、南西部 Tittling のバイエルンの森村落博物館の民家は、典型的な南ドイツ(高ドイツ)型で、緩勾配の柿葺、板葺(石置)屋根、木造組積造(校倉造)の階層型が多い。民家型式にはスイス、チロルとの密接な関連性がある。なお、他に、伝統技術文化の野外博物館(ハーゲン)と先史考古野外博物館(ボーデン湖畔)を調査している。



1. *Kiel* 2. *Husum* 3. *Meldorf* 4. *Hamburg-Volksdorf* 5. *Kiekeberg* 6. *Bremenhaven-Speckenbüttel*  
 7. *Bad Zwischenahn* 8. *Cloppenburg* 9. *Bielefeld* 10. *Detmold* 11. *Münster* 12. *Hagen*  
 13. *Kommern* 14. *Neu Anspach* 15. *Sobernheim* 16. *Bad Windsheim* 17. *Gutach (Schwarzwald)*  
 18. *Unteruhldingen* 19. *Kürnberg* 20. *Wolfegg* 21. *Gossweil* 22. *Tittling* (—1984年)

図6 ドイツの野外博物館と家屋型分布図



## 2.1 北ドイツ地域

### 2.1.1 シュレスヴィヒ=ホルシュタイン野外博物館 [Schleswig-Holsteinisches Freilichtmuseum]

Kiel 市郊外 Molfsee の砂丘地帯で、起伏があり、森や池があるすばらしい環境 (40 ha) に位置している。Schleswig-Holstein 州立で、1965年に開館し、拡充を進めている。例えば、移築復元した民俗建築は、1971年と1984年では33棟から57棟（農家、穀倉、家畜舎など）と増加し、他に風車、水車など7棟が加わる。現在計画、建設中のものが11棟ある。管理棟も完成している。

州内の地域性を考え、北海沿岸の Eiderstedt・Ditmarschen・Nordfriesland、バルト海側の Angeln など各地域別に配置している。

草葺、妻入型、柏材を使った半木軸組で、柱間をレンガ壁にしたもの。間取りは広土間、家畜舎、居住部の3部分からなり、屋根裏は乾草収納などの機能をもつ。北ドイツの農村生活を反映した機能一棟集中型の単一家屋 (Einhaus) が多い。いわゆるザクセン型である。この他、広土間の部分がザクセン型より整備された巨大な寄棟型の屋根をもつフリース型もある。北ドイツ (低地ドイツ) を代表する民家型式をまとめてみる事ができる。

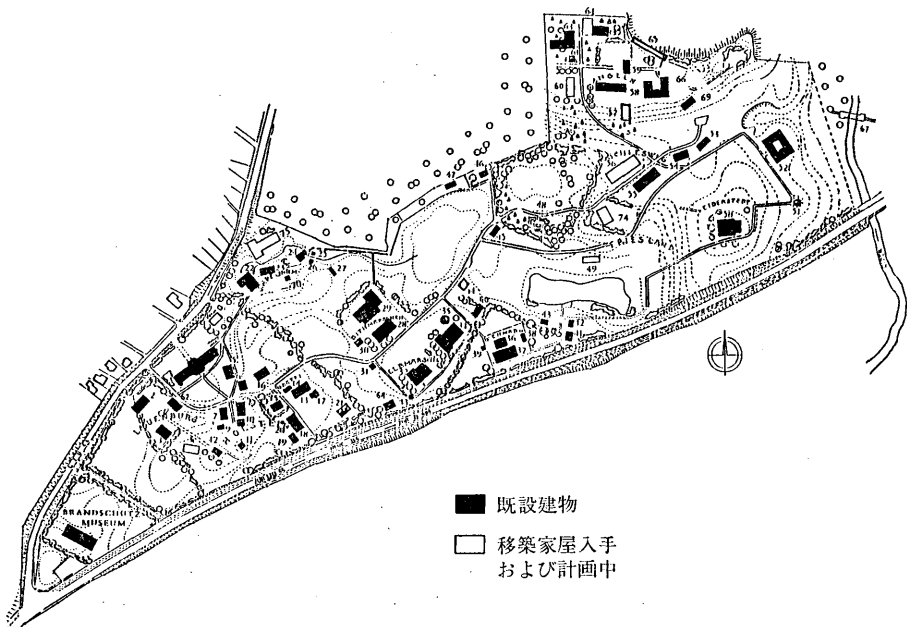


図7 Schleswig-Holstein 野外博物館配置図  
[KAMPHAUSEN 1980] による

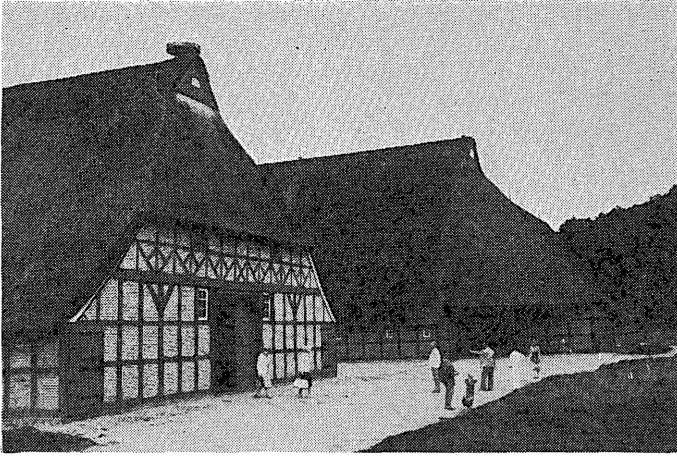


写真11 ザクセン型の民家，妻入，半木軸組 (Fachwerk) でレンガ壁  
[Schleswig-Holstein 野外博物館]

起伏のある砂丘の高台に風車を配置したり，池畔に漁家を配するなど自然環境を巧みに利用している。牧草地も広く，乳牛や羊が放牧してある。靴づくり，鍛冶屋，製材所，村のパン焼小屋など，伝統的手工業の作業風景をみることもできる。特定のザクセン型民家では，広土間や家畜舎を活用し，生活用具，農具，馬車などを展示したり，民家の構造模型を陳列し，系統的な理解ができるよう配慮している。当館のガイドブックや絵葉書類，年報，Schleswig-Holstein 州の民俗資料のパンフレット，民家研究書なども多い。とくに A. Kamphausen の当博物館の民家とその発達史 [KAMPHAUSEN 1970] や，館長 C. I. Johannsen のザクセン型民家の詳細な研究書 [JOHANNSEN 1979] など貴重である。

### 2. 1. 2 デイトマーシュ農家博物館 [Dithmarscher Bauernhausmuseum]

北海沿岸の低湿地を干拓した平坦地 Ditmarsch 地方の中心町 Meldorf にある。町の外縁，樹々に囲まれた平坦地に位置する小野外博物館で1907年にできた。ザクセン型民家1棟で，半木軸組，レンガ壁。広土間に馬車，農具類の展示がある。壁飾りやレンガ壁は，北海沿岸を通じたオランダの文化的影響といわれる。

Meldorf の市街地にある郷土博物館には，民家模型，民具，民家室内の部分展示や，郷土 Ditmarsch 地方の干拓に関する資料が多く，野外博物館と補完関係にある。

### 2. 1. 3 アンメルランド民家野外博物館 [Freilichtmuseum “Ammerländer Bauernhaus”]

北ドイツ，ニーダザクセン州西部 Ammerland 地方の郷土野外博物館で，Olden-



写真12 ザクセン型, Ammerland 地方の地主の家  
[Ammerland 民家野外博物館]

burg の西, Bad Zwischenahn の湖岸の緑地公園 (2 ha) にある。1910年に風車1基からスタートしたもので, Bad Zwischenahn の郷土会によって運営されている地方(地域)野外博物館である。



写真13 広土間の奥にある裸炉, 大きな火棚と自在鉤(地主の家)  
[Ammerland 民家野外博物館]

Ammerland 地方の農家のうち, 地主の家は大型のザクセン型で, 湖畔の葦で葺いた屋根, 妻側に小破風をもつ屋根の一部がさがった半切妻型で, 棟には風見棒が立っている。頭丈な半木軸組(木軸梓組)で, 柱間はレンガ壁, アーチ式の入口を挟んでシンメトリックに小窓を配し, 広土間への明かり取りにしている。入口は乾草を満載した荷馬車がそのまま入れる高さで, 広土間(Diele)があり, 両側は家畜舎で, ここに農具, バターづくり桶などを展示している。土間のつきあたりに大きな裸炉があり, 鉄製の刻み自在鉤が, 彫刻のすばらしい大きな火棚からぶらさがっている。裸炉の周辺にはテーブル, 椅子, 食器類が並べられ, 食堂であった住んでいた当手を再現している。

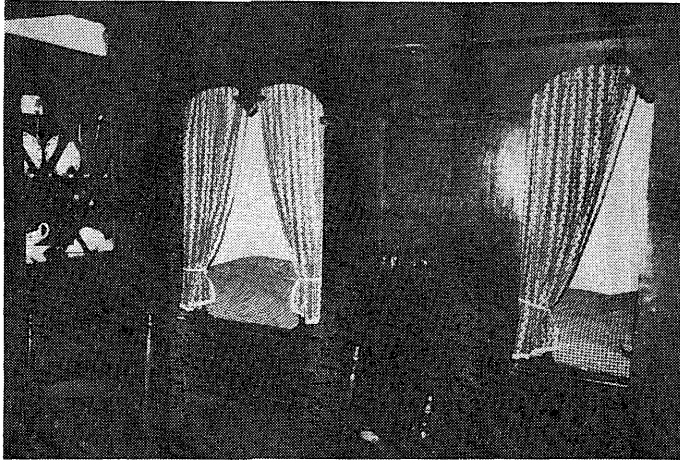


写真14 寝室のアルコーブベッド（地主の家）  
[Ammerland 民家野外博物館]

奥や一部脇部屋は、居間と寝室で、アルコーブベッドになっている。広土間では、指導員がいて、木靴作りの工程実演や、伝統的なロープ作りを観客が体験しながら学べるようになっている。

小作の家は小型のザクセン型だが、妻側の小破風をもつ庇状の屋根がふくらみを持ち、棟には厚く芝土（泥炭）が置いてあるなど、地方色がみられる。

この博物館の展示の中心だった風車は野外博物館のほぼ中央にある。その他、車小屋、ポートハウス、木挽小屋、環濠をもつ穀倉、養蜂小屋、鍛冶屋など計15棟が集められている [SANDSTEDE 1984]。

#### 2. 1. 4 ブレーメンハーフェンの野外博物館 [Freilichtmuseum des Bauernhausvereins im Stadtpark Speckenbüttel]

1909年に創設された古い歴史をもつ野外博物館で、ブレーメンハーフェン北部 Speckenbüttel の広々とした緑に包まれた市立公園 8 ha の敷地内にある。ザクセン型の農家など7棟と風車1基を配している。

#### 2. 1. 5 ミュンスター風車野外博物館 [Mühlentof-Freilichtmuseum Münster]

ウェストファーレンの古都 Münster の旧市街を出はざれた対岸の河畔丘陵地は公園地帯だが、その一画にある。中央にそびえる風車は台座のあるドイツ式風車で、この野外博物館のメイン展示。Münster の風車協会による運営である。風車の周囲には Münsterland や Emsland から移した各種建物が配置してある。

民家は2棟で、Münster-Nienberge の Schonebeck の地方領主の家は環濠がある。

主屋は間口 19.53 m, 桁行 32.55 m, 高さ 13.5 m の壮大なもので [BREIDER 1981], 切妻瓦葺, 半木軸組 (Fachwerk) で壁は手づくりのレンガを積んである。妻側の大きな羽目板はウェストファーレンの特色。間取りはザクセン型で, 広土間の両側は家畜舎, 土間奥に裸炉を中央に, 居室の暖炉への焚口が2つあり, 奥の居住部分は少し高くなり, 階段がつく。柏材の頑丈な木組には一種の風格がある。

1619年に建築された製粉所つきの農家は典型的なザクセン型で, 屋内は生活復元展示になっている。門屋, 養蜂所, 屋敷の小教会, 路傍のキリスト祠, 鐘架の他, 製粉所, 製材工場, 木靴工房, 馬車など各種の車類を集めた車庫, 炭焼小屋など風車を中心とした一種の農村工業的なものを多く集めている。建物は大半, 木組の美しい半木軸組である。

## 2.2 中部ドイツ地域

### 2.2.1 ゴーベルハイム野外博物館 [Freilichtmuseum Sobernheim]

中部ドイツ, ライン川左岸の Rheinland-Pfalz 州, ライン地峡の南端, 古城と古い町並の残るビンゲンから, 支流 Nahe 川に沿ってローカル線で入った地方町 Sobernheim の南郊にある。

Nahe 川を渡り, 標高 200 m 余の丘陵性山地を越えた緑に包まれた谷間とスロープが野外博物館の敷地になっている。州立で, 1973年に創設, 1977年に開館している。Rheinland-Pfalz 州の6地域を代表する Museumdorf を建設する計画で, 現在 Mosel Dorf, Hunsrück Nahe Dorf, Mittelrhein-Westerland Dorf の3つがほぼ完成している。農家(主屋)と穀倉, 納屋, 鍛冶屋, パン焼小屋, 靴工房, 炭焼窯, 製材工場, 村の学校, 養蜂小屋など計11棟から成る。民家は主屋のみ個別に移築復元したものと, Weinsheim 屋敷(1720年)のように主屋, 納屋, 牛小屋, 豚舎などが中庭を囲む閉庭型(閉鎖型)の屋敷建物配置(セット展示)がある。いずれも美しい木組をみせる半木軸組 (Fachwerk) だが, 1階を石壁にしたものも混在している。

その他, 路傍の十字架, 石橋などもあるし, 野外博物館入口に SL が置いてある。完成時は 50 ha となる予定。Rheinland-Pfalz 州の民俗建築, 集落の復元, 生業形態の再構成をめざして建設進行中である。

### 2.2.2 ヘッセン公園野外博物館 [Freilichtmuseum Hessenpark]

Hessen 州立野外博物館。フランクフルト西北郊, 衛星都市 Bad Homberg から, 400 m 前後の緩やかな Taunus 低山地帯へ入った Anspach 近くの森に包まれた Hessen 公園内にある。35 ha の広い敷地は起伏に富み, 森, 牧場の中に池がある。8 セクションがあり, そのうち5 セクションは, Hessen 州内地域区分による配置で,

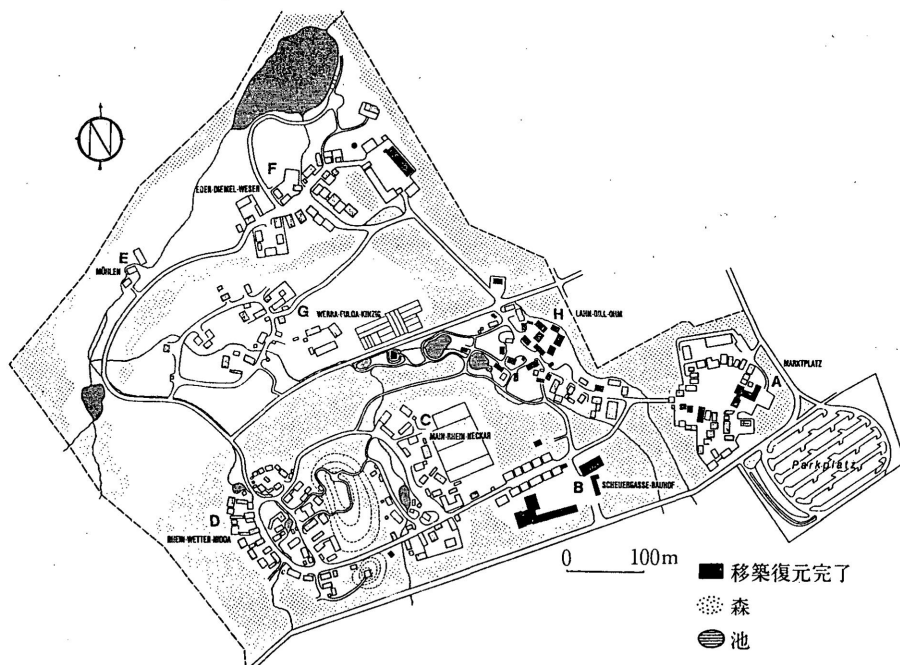


図8 ヘッセンパーク配置図  
[ERNST 1980] による

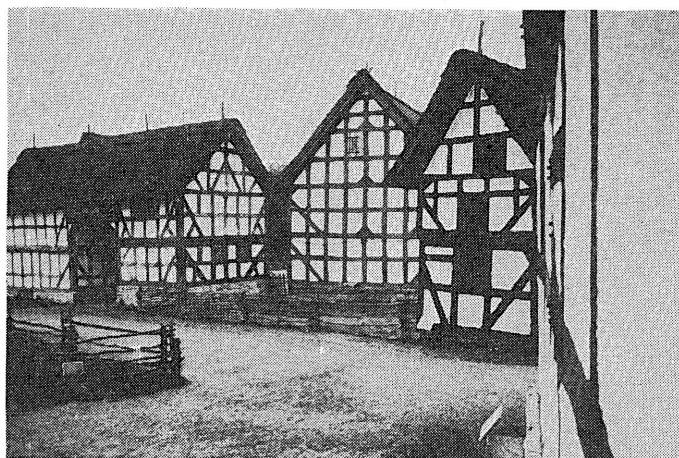


写真15 木組の美しいヘッセン州 (Lahn-Dill-Ohm セクション) の民家  
(解説パネルは小さくしてある)

村の広場を囲むような集落形態を再構成するようになっている。

1974年創設され、現在 Hessen 州中西部 Marburg 近辺のライン川支流 Lahn-Ohm 川, Dill 川流域 (Lahn-Dill-Ohm) のセクションがほぼ完成している。ほとんどの建物は、切妻屋根、半木軸組 (Fachwerk) で、斜材 (筋違) も入り、壁面の木組は実に幾何学的である。主屋、門屋、納屋、家畜舎などが中庭を囲む中部ドイツ型の典型的な屋敷建物配置がみられる。家畜舎には牛や羊などが飼われ、鶏が遊ぶ。生きた農村生活の再現に力を入れている。村の広場を囲むように、村の学校、古い村役場、教会なども配置してある。村のパン焼小屋、水車、石切場の小屋、陶器工房、炭焼小屋なども集めてあり、伝統的な村の生活風景を展示しようとしている。

建物内部は生活用具類 (数は多くないが) をもと使っていたままの場所に配置している。

村の学校など数棟では、資料館的に農具類を陳列したり、パネルを用いて地域の自然や歴史 (アメリカ移住の歴史その他) などの解説をしている。各建物の入口には小型パネルで (色彩にも配慮)、建物の原地を示す地図と簡潔な解説がついているが、目立つものではない。建物を標本化するよりも、自然一家屋一生活をセットにして包括的に展示しているといえる。この展示方式は多くの野外博物館で共通している。パネルの解説は少ないが、充実したガイドブック [ERNST 1980] がこれを補っている。

入場門の辺りに **Marktplatz** があり、広場を囲んで木組の美しい民家が建ち、事務室、売店や食堂になっている。食堂も半木軸組 (Fachwerk) の民家をそのまま活用しているの、木組の構成・室内装飾も民俗色豊かである。

現在も建築中の建物や移築復元のための素材が建物別に山積みされており、建物の移築復元は優秀なスタッフによって精密に行われつつある。完成時には **Kommern** のライン州野外博物館と共に中部ドイツを代表する野外博物館になるであろう。

### 2. 2. 3 フランケン野外博物館 [Fränkisches Freilandmuseum Bad Windsheim]

バイエルン州には大小21の野外博物館がある。広い州内では民家にも地域差が顕著である。バイエルン州の北部に位置する **Bad Windsheim** は、ニュルンベルクの西方に位置している。中部フランケン地方である。野外博物館は1976年創設、1982年開館した新しいもので、**Bad Windsheim** 旧市街に接した南側の小河川に挟まれた田園地帯の一面にある。

中部フランケン地方の各地区から集めたもので、3地区に分けている。現在15棟余。農家、穀倉、納屋、家畜舎などは、切妻か寄棟で瓦葺屋根、半木軸組 (Fachwerk) で、レンガ壁の他に木摺り下地にプラスターの塗壁もある。木組は方形、斜材の組み合わせ

せが見事で、絵画的な美しさをみせる。1階は石積壁の民家も混じっている。閉鎖型屋敷建物配置の民家もあり、中部ドイツ型が優占している。

地方の小野外博物館だが、精密な図面や写真を用いた堅実なガイドブックをもっている [BEDAL 1982]。

## 2.3 南ドイツ地域

### 2.3.1 バイエルンの森村落博物館 [Museumdorf Bayerischer Wald]

Bayerischer Wald は、バイエルン州東南部、チェコスロヴァキアとの国境をなすボヘミア山地の前山にあたる。この野外博物館は国境の町 Passau の北方、高原状の緩やかな山並みの中にある Tittling の村近くの小川（谷）に沿う小盆地状の谷地形（12 ha）に1974年開設された。小湖畔にある民芸風ホテルと野外博物館はセットになって観光会社によって経営されている。

15～19世紀のバイエルンの森地方の民家30棟の他、穀倉、家畜舎、納屋など農牧関係の建物、製粉所（水車）、皮なめし工場、製材（水車）、織物小屋、鍛冶屋（水車）など農村工業関係の建物があり、谷地形を利用した水車動力によるものが目立つ。村の学校、村の木造教会や死者の名を記した板、ペスト記念柱など120件余が集められ、伝統的村落生活と民俗文化を再現しようとしている。

民家は緩勾配の柿葺で石置切妻屋根、階下を石積壁、2階以上を校倉造り（角材が多い）にしたものが18棟で最も多く、全面校倉造りは11棟、石積壁は1棟となってい



写真16 Bayerischer Wald の民家（石積壁と校倉造り，バルコニーがついている）  
[Bayerischer Wald 村落博物館]



る。一般に間口よりも奥行の深い平面が多い。2～3層になった階層型一棟集中型で、バルコニーが付いたものがみられ、スイスの民家と類似している。これは1850年代から盛大化したアルプス登山の影響などによってバイエルンで大流行したスイスの家屋型が広がったといわれ、バイエルンの森地方やボヘミア南部にまで及んでいる [太田 1985: 41-47]。

村の学校や2～3の民家（例えば水車製粉所のある民家、1階石積壁、2・3階校倉造り）は、寝室には日常の民俗衣装や各種生活用具類、宗教画等々。居間には祭りなどハレの民俗衣装やアイコン類、ガラス製品などがまとめて展示してある。最上階は、漁網、筥など河川漁業関係の資料が陳列しており、展示館になっている。

狭い谷地形に建物が過密に展示してあるようだが、移築復元や生活用具類の収集展示も着実で、現在も谷の奥へ拡張工事を進めている。

### 2.3.2 キュルンバッハ野外博物館 [Das Freilichtmuseum Kürnbach]

Baden-Württemberg 州の南東部、ウルムとボーデン湖との中間、上シュヴァーベン地方の Kürnbach 村にある小野外博物館 (1.1 ha)。中心は Kürnbach の古民家 (1664年) で、巨大な草葺寄棟屋根、下部は木造組積造り (校倉造り)、上部は半木軸組になっている。一棟機能集中型で、この型式は西側のシュヴァルツヴァルトの棟持柱をもつハイデン型 [Schilli 1978; 杉本 1980: 543-547] との関連が推察される。

草葺寄棟の建物は4棟 (納屋1)、他に瓦葺、柿葺で半木軸組の穀倉、鍛冶屋などがある。上シュヴァーベンの代表的古民家を集めてある。

### 2.3.3 ウォルフエック民家博物館 [Bauernhaus Museum Wolfegg]

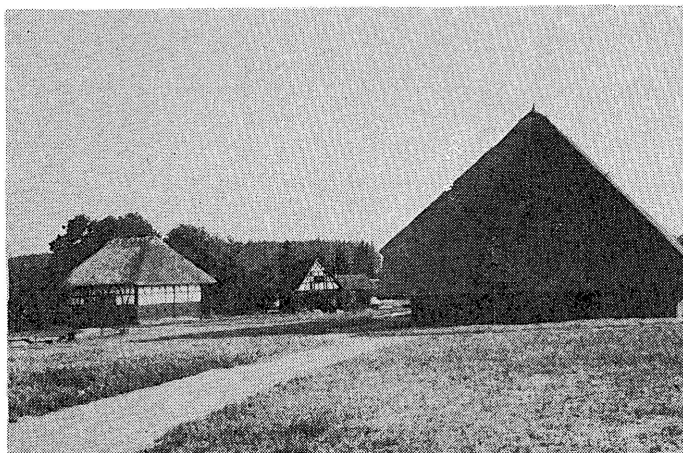


写真17 上シュヴァーベン地方の民家を集めたキュルンバッハの野外博物館 (右側草葺屋根は一棟集中型の大型民家)

Krünbach から南へ下った地方町 Ravensburg から東へ十数 km の Wolfegg 城の丘の麓にある野外博物館。当地の農村文化保存協会によって、1978年開館した野外博物館である。現地にあった農家（1778年、1階石壁、2階以上半木軸組）など2棟を核に、上シュヴァーベン各地の民俗建築を移した。現在、農家、納屋兼農家など4棟の他、家畜舎、養蜂小屋、鶏小屋、家畜の蹄鉄打の小屋、パン焼小屋など計10棟あり、家畜舎や納屋を増設中であった。

上シュヴァーベン南部地方の1705年の古民家は、階下は石壁で上部（3層）は校倉造りになっている。2つの農家では、屋内に農具、生活用具、民俗衣装、キリスト像などを展示し、人形を使った生活復元展示を試みている。納屋ではアヒルなども飼育している。時間によって藁細工などの実演もある。

第1期完成は1985年で、将来25～30棟を集め、地域の民俗文化の調査研究を行って、家具、農具の収集、家畜の飼育、伝統的農法、伝統工芸などをくみこんで充実を計るといふ。Krünbach の野外博物館は草葺の一棟集中型が特色だが、本館は半木軸組の系統が多く、校倉造りと石積壁が混在している。両野外博物館は上シュヴァーベン地方の民家 [BUCHMÜLLER 1982] を概観する上で補完関係にあるといえる。

### 3. スイス・フランス

#### 3.1 スイス

スイス各地には優れた自然環境と共に伝統的な民家なども比較的多く残存していたため、野外博物館建設の必要性が薄かった。しかし近年の民俗建築の減少傾向と観光立国的な背景、あるいはスイス連邦としての国家意識の昂揚も一因となつたのであろうか。1978年にスイスを代表する国立の野外博物館が誕生した。

スイスにおける民家研究は、R. Weiss [WEISS 1973] や M. Gschwend [GSCHWEND 1971] の総合研究や、スイス民俗学協会によるスイス民俗建築シリーズ（カントン別の詳細な研究）、郷土誌類、写真集などが刊行されており、民家研究は盛大である。このような背景から、Gschwend ら民家研究者が中心となって1960年代から野外博物館の構想、準備がはじまったのである。なお最近、太田邦夫らによるスイスを中心としたアルプス山地の実地調査をふまえた民族建築学的な研究がまとまり、注目されている [太田・浅井他 1982: 71-86, 1983: 279-298; 太田 1985: 41-47]。

##### 3.1.1 スイス野外博物館，バレンベルク [Das Schweizerische Freilichtmuseum Ballenberg]

スイス野外博物館は、インターラーケンに近い Brienz 湖から東へ入った Ballen-

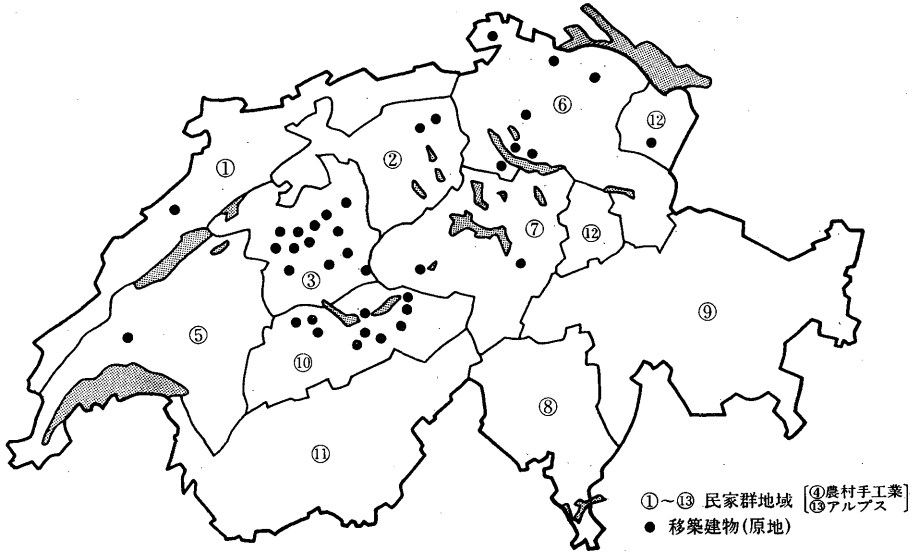


図9 スイス野外博物館，移築建物原地分布図（1984年現在）

berg 地区にある。周囲をベルナーアルペンの高峰に囲まれた緩やかな起伏をもつ丘陵性山地（標高 630～700 m）である。自然保護地域で森林地帯をふくみ、滝などもみえるすばらしい自然環境である。面積は 50 ha あり、この中を13地区に分けているが、2地区（④農村手工業関係と⑬アルプス）を除き、スイス全土をほぼカントン領域を踏襲しながら11地域に区分して、民家の移築を進めており、現在8地域がかなり進展している。現在38棟（民家18棟）があるが、図9のように、Bernese Oberland スイス中央高地地区(10棟)および、北側のジュラ山脈との間にある Bernese Mittelland 地区 (13棟)，チューリヒ近辺の 東部 Mittelland 地区 (7棟) が完成に近づいているが、他の地区は1～2棟で、Wallis, Tessin, Graubünden, Alps 地区は移築予定区域が定まっている程度である。

移築の進んでいる地区の民家を概観する。

Bernese Mittelland の民家は、一般に急勾配屋根で、階層家屋が多い。事例：Midswil から移した1710年の古民家、寄棟型の急勾配屋根で柿葺。棟持柱をもつ大型屋根で、シュヴァルツヴァルトのハイデン型と類似している。校倉壁であり、階層構造になっている。

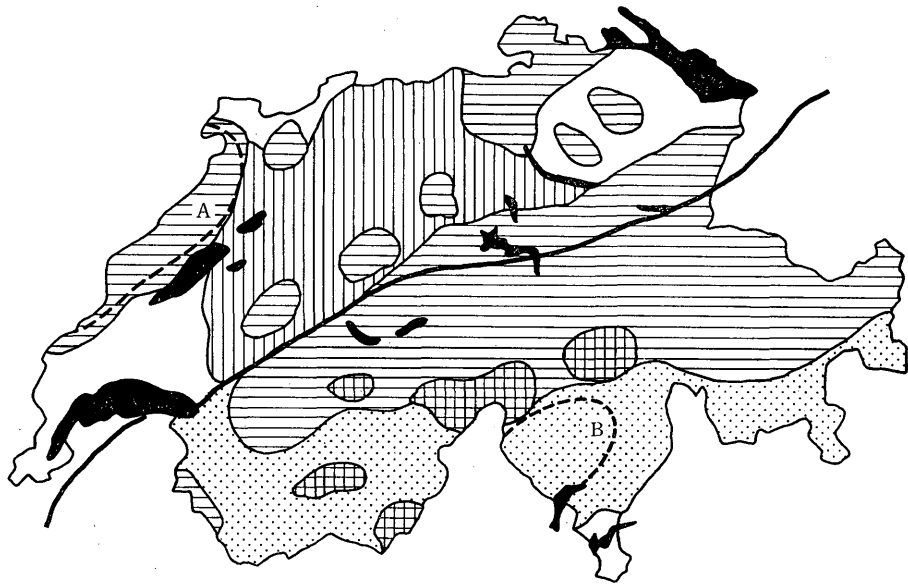
Ostermundigen から移した民家（1797年）も大型屋根で、とくに妻側のアーチを描く庇やバルコニーが特色。4層になった壮大な階層家屋で、家畜舎や屋根裏を利用した乾草収納空間が実に宏大で、山の斜面から屋根裏へ馬車で直接搬入できるように

なっている。シュヴァルツヴァルト民家との関連も考えられる。現在はこの広い空間で農機具の展示や酪農関係のパネル解説展示をしている。

Bernese Oberland は、一般に緩勾配の板または柿葺屋根（石置）が多く、校倉造りの壁面または階下石積壁、2階以上校倉壁の構成となっている。高所にあった製酪小屋や、石を積んだ高床式の校倉造りのチーズ小屋も見逃さない。

東部 Mittelland はスイスの北東部地域で、半木軸組（Fachwerk）の発達した民家が特色で、この形式は他の形式と混在しつつ中部 Mittelland にも及んでいる。

19世紀末～20世紀初頭のスイスにおける民家屋根材料や、壁面の材料と構造の分布図（図10, 11）をみると、ほぼ東西にひろがった帯状の分布が特徴的である。木造民家の屋根の勾配もアルプスを境に異なり、図10実線の北側は急勾配、南側は地中海地



民家屋根材料と勾配(19C末)

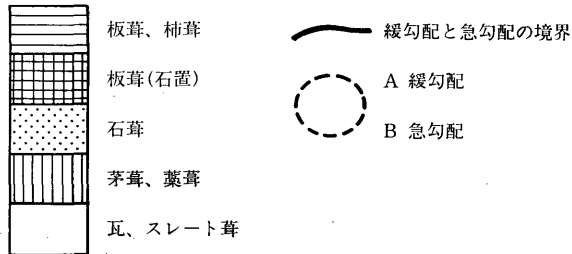
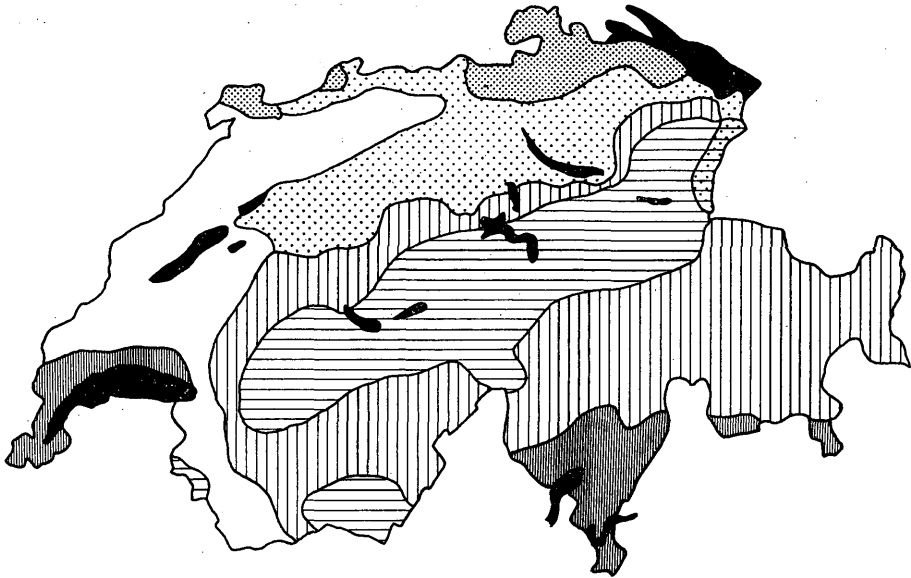


図10 スイス民家屋根材料と勾配分布図  
(R. WEISS, 太田邦夫氏らの分布図によって編図)



民家壁面の材料と構造(1900末)

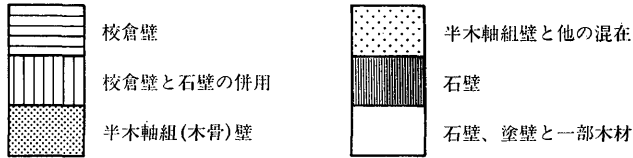


図11 スイス民家壁面の材料と構造分布図  
(R. WEISS, M. GSCHWEND の分布図により編図)

域の伝統である緩勾配が優越している [太田・浅井他 1982: 71-86]。これら分布の特徴は、ベルナーアルペン、中央アルペン (Inner Alpen)、南アルペンなど、ほぼ3～4列のアルプス山系の走向と無関係ではないが、この山地の通谷や峠など古来からの交流路を通じて、巨視的には北の木の文化と南の地中海の石の文化をはじめ諸様式の伝播が行われたことも重要である。

移築建物38棟の構成は、民家18棟 (1棟はレストランに活用)、穀倉、家畜舎など10棟、製材所、炭焼小屋、搾油水車、ぶどう酒醸造所、養蜂小屋、パン焼小屋、チーズ小屋など10棟である。生活用具類などの展示は比較的少なく、さりげなく生活の姿を伝えようとしているようである。農家では炉に火を燃やし、スモークルームにはベーコンやハムなど (レプリカ) が吊ってある。納屋は乾草の臭いが満ちている。糸紡ぎ、糸梳き、箱作り、炭焼き、木工細工、レース編みなどの実演も行われる。

主要民家に付属した農園では、果樹、野菜、麦類、馬鈴薯などを作り、乳牛を飼う

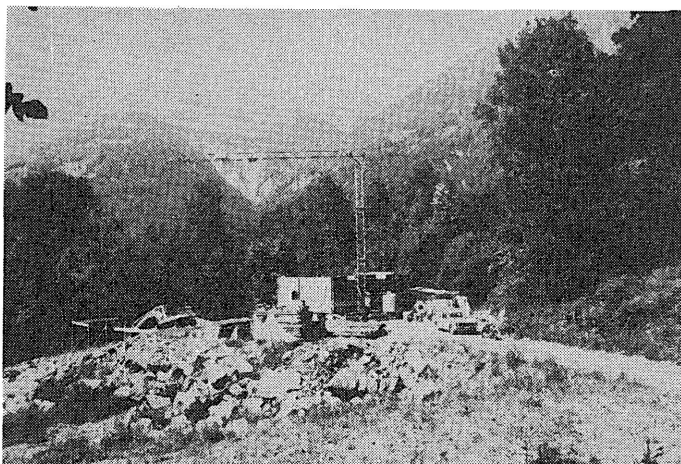


写真18 移築復元中の民家  
(アルプスの山々に囲まれたスイス野外博物館：パレンベルク)

など、農牧生活の再現には力を入れている [Gschwend, Fehlmann and Hunziker 1982]。自然と人間と田園風景のハーモニーを求めているわけである。各建物の詳しい解説は、コンパクトなリーフレット、ガイドマップ、ガイドブックで充分補っている。特定民家では「パンの歴史と地方色」「酪農の歴史」などの特別展示をしている。館内のガイドツアー、売店、レストラン、ホテル、駐車場なども完備しており、観光の新拠点として、スイスの伝統的庶民文化の大センターの建設を目標としている。

### 3.2 フランス

フランスには、創設、建設進行中のものを含めて8野外博物館がある。フランスでは、野外博物館を生態博物館 [Ecomusée] と称している例が多い。Ecomuséeの中には、上アルザスの Ecomusée のように、ドイツ的な野外博物館もあるが、ボルドー南方の Marquèze の Ecomusée や、ローヌ河口地域 Camarque の博物館のように、総合的な自然保護政策の一環として各地に設けられた地域自然公園 [Parc Naturel Régional] の中に立地するものが多い。

なお、南仏プロヴァンスの Vaucluse 地方 Gordes 南西郊の山腹緩斜面に、この地方にあった純石造家屋敷5つを復元した Bories 村 [Village des Bories] のような小規模なものもある。

パリのブローニュの森にある国立民芸民間伝承博物館 [Musée national des arts et traditions populaires] [佐々木 1973: 16-33] は、フランス各地の農村生活に関する「モノ」(例えば各地方の鎌、斧、犁など農具類、牛馬の軛、木箱、ぶどう酒樽、

民俗衣装……) が展示され、村の鍛冶屋や民家模型、民家の実物や部分展示もあり、全国の伝統的庶民の生活文化を系統的にみることができる。最近、当博物館の監修による地域別の『フランスの農村建築』シリーズ [L'architecture rurale française] が出版されつつある。充実した詳細な研究だが、大半が1940年代に実施された調査結果を基礎にしたものなので、現在消滅した民家も多いが、基礎的資料として貴重なものである。

### 3. 2. 1 上アルザス野外博物館 [Ecomusée de Haute Alsace]

上アルザス地方の中心都市 Mulhouse 北郊、Pulversheim と Bollwiller 間の平地に立地している。1984年6月、アルザス農家保存協会の努力によって開館した新しい野外博物館である。約 5 ha の敷地に上アルザス地方各地から、農家、穀倉、納屋、家畜舎、園亭、養蜂架など20棟余を集めている。

アルザスは、古期地塊のヴォージュ山脈とシュヴァルツヴァルトに挟まれたライン地溝平野で、ヴォージュ山脈の急斜面と谷、山麓の石灰岩性の丘陵、平野部(肥沃な黄土からなる段丘とライン低地の沖積地)からなり、小麦、ぶどう栽培など農業の盛んな地域であった [プザー 1982: 174-179]。上アルザスは細長いアルザス地域の南部の地域になる。

本館の民家は、過半は Mulhouse 以南の Sundgau 地方のものである。(1) Sundgau の民家 (2) 村の広場を囲む民家、(3) 平地農家とぶどう栽培農家の3セクションになっている。

屋根型や木組に微妙な地方色はあるが、いずれも美しい半木軸組 (Fachwerk)、土壁 (白壁の他、彩色壁もある)、平瓦葺で、3~4層の階層家屋が多く、中庭を建物や塀で囲む閉鎖型の屋敷建物配

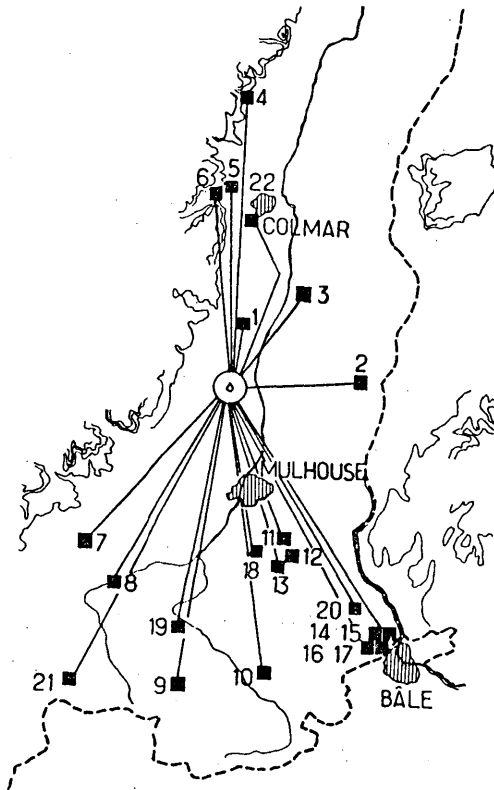


図12 上アルザス野外博物館移築建物原地分布図 (7~20: Sundgau)

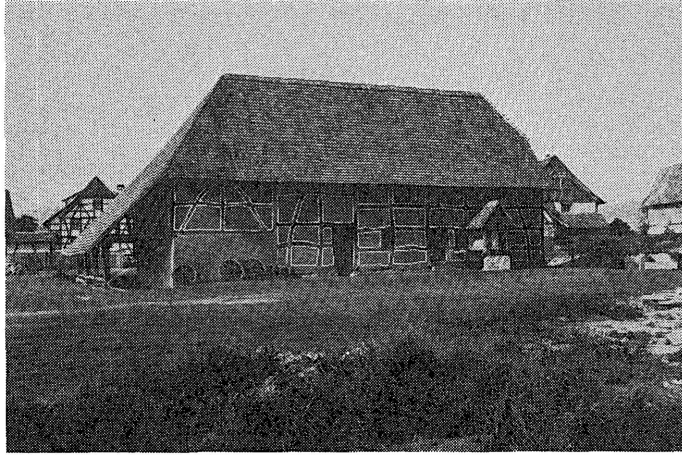


写真19 上アルザス, Sundgau, Sternberg の民家 (牧草地や池を配してある)  
[上アルザス野外博物館]

置もある。ドイツとの交界地域としての歴史が民家型にも反映している。

(1) Sundgau の Sternberg の民家は、近くに牧草地と池を配している。居住部分、家畜舎、乾草納屋、馬車庫などが同一棟に集まった一棟集中型 (maison bloc, Einhaus) で、寝室には、台所に焚口をもつ包炉があり、台所の煙は屋根裏へぬける。乾草収納庫は吹抜きになった巨大な屋根裏である。

(2) 村の広場を囲む民家は、井戸のある広場をとり囲む形だが、主屋、納屋、穀倉などを組合せて中庭を囲むような配置にしてあり、切妻や半切妻の妻壁の木組が多様で、絵画的なアルザス地方の村の雰囲気を出している。

臨時案内所になっている Muespach の大型農家は一部休憩所に改造し、ビデオで民家の移築状況や館の概要を解説している。

(3) 平地農家では、主屋、大型納屋とT字型に組み合わさった階下が柱列吹抜きの打穀場になった建物が、中庭を石積みの塀と共にとり囲む。いわゆる閉鎖型の配置に再構成されている。荷馬車などを通すアーチ式の立派な石の門がある。平地ぶどう栽培農家は、階下がぶどう貯蔵庫であった。この建物は地方産のぶどう酒を出すレストランになる予定という。家の前面にはぶどう畑が再現されるし、その中に丘陵地帯のぶどう栽培地域から移した園亭 (物見小屋) が建っている。

開館後日も浅く、環境は整備中で、建物も1/3は建築中。屋内の生活用具類の展示も未完成であったが、ガイドブックは美観かつ内容の充実したものができている。生活のある上アルザスの伝統的農村の再構成を目ざしている。

### 3. 2. 2 マルケーズ野外博物館 [Ecomusée de la Grande-Lande Marquèze]



ボルドーの南方、Grande Lande の地域自然公園 (Parc Naturel Régional Des Landes De Gascogne) の中にある。

ビスケー湾に沿う Landes 地方の海岸は直線状で、大砂丘が発達している。砂丘地帯は幅 5~10 km におよぶが、この地帯は深さ 0.5~1 m に砂岩があり、これに酸化鉄をふくむ水が浸透して固まり、透水性が悪く、湿った砂地の Moorland であった。羊飼いはマラリア、甲状腺腫などから身を守るため高い竹馬を使って羊の群を追っていた [プズー 1982: 253-256]。

19世紀に入って砂丘の内陸への移動を防ぐため海洋性の松の植林がはじまり、排水事業の進展によって広大な松林が形成され、現在 100 万 ha に達した。そのうち 206,000 ha が地域自然公園に指定されている。

Marquèze の Ecomusée は地域自然公園の中にあつて、自然を保護しながら、19世紀末頃までの、この地方の地主や入植した借地農や小作人によって行われた伝統的な農牧生活を保存し、地方の生態的条件や文化的伝統に適応した農民の生活文化を伝えようとしている。

Sabres 村の小駅舎にオフィスがあり、野外博物館への案内、配置図、地域自然公園の図が掲示してある。交通の不便な地域であり、気候の関係もあつて夏季(6月15日~9月15日)のみ開館している。廃線を活用した観光列車(1日5往復)で 3.5 km、砂地の松林の間を走ると、やや開けた地区があり、民家や柵、畑などが並ぶ。標示がなければ普通の村と思えるほど自然のままにしてある。

敷地は森をふくんで 130 ha もあり、一面松林で、標高 75~80 m、やや起伏があ



写真20 廃線を活用して観客を運ぶ  
(マルケーズ野外博物館)

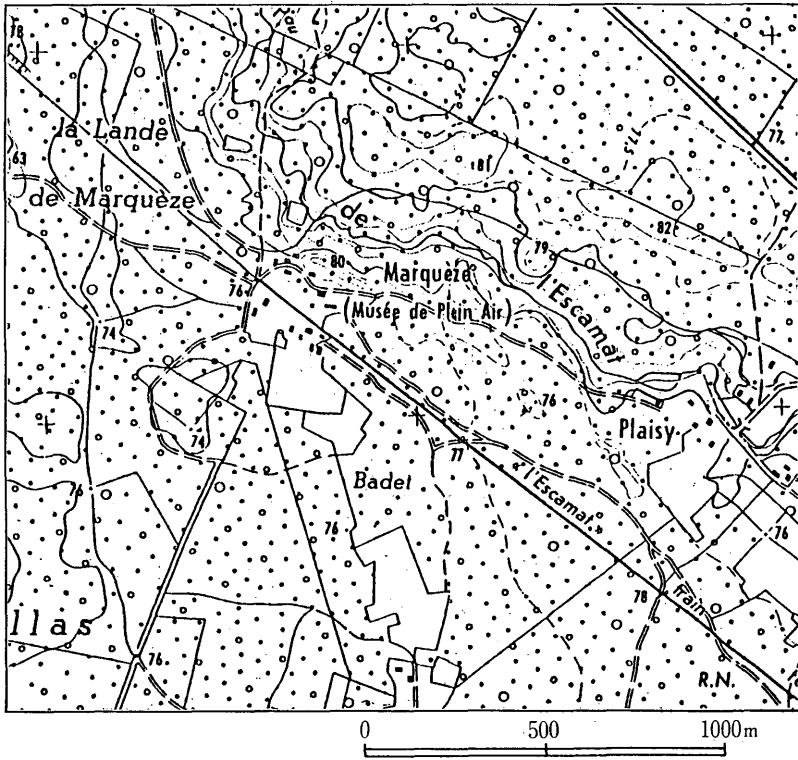


図13 マルケーズ野外博物館の環境  
(Institut Géographique National 2.5万分ノ1地形図 Sabres 図幅による)

る。Leyre 川の源流に近い小川が野外博物館の東寄りを流れて景観に変化を与えている。

地形図をみると、Ecomusée 以外でも、松林の中に小耕地があり、数戸の民家が集まった小村 (Weiler) 状の村落が分布している。

(1) 民家などが比較的集まっている開けた区域、(2) 森林 (海洋性の松林)、(3) 叢林、(4) 河川沿いの地区、(5) 伝統的農耕の 5 地区に分けられる。(1) 地区のほぼ中央にある草葺の小屋がインフォメーション兼軽食堂、隣接する丸瓦葺木軸組の建物は展示場で、当地域の自然公園やフランス全土の地域自然公園、農耕や方言分布図などが展示してあり、自然保護など自然と人間とのかかわりを軸とした地域の理解を深めるような配慮がしてある。

民家は大屋根の地主の家が 3 棟、奉公人の家 (地主の家と屋敷セット配置)、小作人の家のほか、穀倉、納屋、荷馬車小屋、高床式の鶏小屋、養蜂小屋、羊舎、パン焼

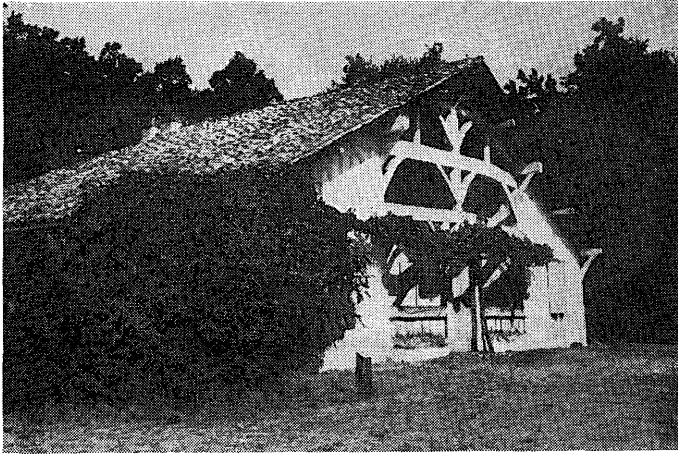


写真21 松林に囲まれたランド地方の民家（地主の家）  
 【マルケーズ野外博物館】

小屋，豚小屋，井戸（ハネツルベ式）などがある。納屋など草葺屋根のものもあるが，大半は赤味がかかった丸瓦葺で，壁面は半木軸組である。ドイツの民家と異なり，柱の間隔が狭い形式が多い。Landes 地方の特色である。

Marquèze にあった地主の家は，切妻丸瓦葺屋根で，東面した入口妻側のアーチ形の庇の木造架構が特徴で，壁面は柱間隔の狭い半木軸組，壁は枝を編んだ芯に土壁を塗り，白漆喰で仕上げている。間取りは間口 20 m，奥行で 21 m，ほぼ方形。玄関から入った中央が暖炉のある居間，その背後が台所。左右に 4 寝室と物置，洗濯場などがある [BIDART and COLLOMB 1984: 130-141]。生活用具類は簡素で，松材を用いたものが多い。穀倉の一つは展示場となり，この Ecomusée の植物や昆虫類，農具類を陳列している。

(2) 森林セクションでは，松脂採取風景を見学できる。森林セクションに続く (3) 叢林では，松かさの採集ができるし，炭焼窯があって炭焼作業をみせる。(4) Leyre 川沿いのセクションには，貯水池，木製の堰，水車があり，樹林の中でシダ類など各種の植生をみることが出来る。樹木も柏，栗の大木などはガイドブックにも記載してある。いたるところで自然観察ができるようになっている。

(5) 伝統的農耕のセクションは，6 ha 余の開墾地（畑）があり，松林がとりまく。この地方は湿った砂地の Moorland だったが，粗い褐色の砂岩を犁で砕いて排水をよくし，肥料の投入によって砂地を農地に変えつつある。フランス自然史博物館や国立農業技術調査研究所との共同で，これら伝統的農耕と近代的農耕法による作物の試作や比較も行われている。ぶどう，リンゴ，桃などの果樹園づくりも試みられている。

農具小屋が集めてあり、農具類の展示もある。リーフレットには、ライ麦、とうもろこし、小麦等々季節による作付け図や、伝統的農耕風景の写真と解説も掲載している。

夏休みシーズンには、ガイド役の学生が到着列車の来館者を2～3のグループにわけて案内するシステムができています。自然を満喫しつつその大切さをくみとり、地域の伝統的な農耕文化に接することができる大変ユニークなフランス型野外博物館である。

Ecomusée は、単一の建物や建物の集合した（町並み）型の一般的野外博物館の概念を超え、広い地域をふくむすべての伝統文化の保存と結びついている。Ecomusée の目標は、自然と人間の調和する姿の表現であり、地域文化の調査と保護に努力すると共に、地域自体の発展に寄与し、地域の人々のアイデンティティの確認という面も持っている。この目標を達成するには、学際的研究の進展、自然保護と文化財の保存、社会教育の場としての役割があげられる [HINTEN 1985: 43-64]。

#### 4. スペイン・アイルランド

##### 4.1 スペイン

###### 4.1.1 スペイン村 [Pueblo Español, Barcelona]

地中海地域には野外博物館はほとんどみられないが、スペインではバルセロナとマジョルカ島のバルマに野外博物館的な「スペイン村」がある。

バルセロナの「スペイン村」[Pueblo Español] は、1929年のバルセロナ万国博覧会記念に、都心から西南 2.5 km の眺望絶佳の丘陵地帯モントフィッチの森に造られた。この付近はバルセロナの博物館、美術館、競技場も多く、文化・スポーツセンター的な地区である。

Pueblo Español は面積 2 万 m<sup>2</sup>、7つの広場と20の通りに沿って、スペイン各地から集めた代表的な建物が地方別にまとめられ、コンパクトな町並構成になっている。しかし民家など庶民の建築物はほとんど無い。市庁舎など公共建築物や、教会、領主の館、城門、規模の大きな町家など、ルネサンス以降の限られた階層を対象とした建築物が大半を占めている [山崎 1975: 84-91]。スペイン建築様式のコレクションともいえる。なお、Pueblo は村の意味ではなく、むしろ地方町と村とは構造が類似しており [WORYTKIEWICZ 1981: 171-185]、伝統的なスペインの中規模の地方町といった方が適切なようである。

建物のアトリエでは皮製品、モザイク、オルゴール、籠作り、ガラス加工、木工品、



写真22 観客で賑わうバルセロナの「スペイン村」

金属細工，麻織物，蠟燭作り等々，スペインの伝統工芸品が職人の手によって作られ，製品をみやげものとして販売している。

建物は実物を移築したものよりも，忠実に復元したコピーが多く，その建物の原地の位置を示した地図が表門近くの建物に掲示してある。

マドリッドの西方にあるアビラの町の城門を復元した正門を入ると騎士の通り等の街路があり，プラザ・マヨールをはじめ，各所に広場を配している。広場や街路に沿ってびっしりと各地の建物が建ち並んでいる。アラゴン広場から曲った狭いアーチ通りは坂道で，白い建物，スペイン風ベランダ，植木鉢，街灯など，アンダルシア地方の町並みの雰囲気再現している。街路からは目立たないように配慮しているが，ほとんどの建物が工芸品のアトリエや売店である。広場付近にはレストラン，喫茶店なども配している。バルセロナ観光ルートの中心であり，レクリエーションセンターとしての機能が大きい。『ヨーロッパの野外博物館ハンドブック』の著者 Zippelius は，Pueblo Español を野外博物館のリストから除外しているが，これは展示建物の性格と観光中心の機能が要因である。博覧会型野外博物館，観光型野外博物館のタイプになるであろう。類似の施設で小規模なものとしては，観光を主にした西ドイツ，ニュルンベルクの伝統的工芸の職人街などがあげられる [KURZATKOWSKI 1981: 161-170]。

## 4.2 アイルランド

### 4.2.1 バンラティ城民俗公園 [Bunratty Castle and Folk Park]

アイルランドを代表する野外博物館である。西海岸のシャノン国際空港に近いバン

ラティ城（1460年）を含む民俗公園で、1959年にシャノン国際空港の滑走路拡張のため古民家が撤去されることになったのを契機に、古民家保存への動きが高まった。当時バンラティ城修復とホテル建設が進んでおり、これら観光産業をふくむシャノン自由空港開発会社によって、西海岸シャノン河口地方の民家調査が行われ、代表的な古民家を選んだ。この野外博物館の建物の大半は移築ではなく、調査資料によって忠実に再構成したレプリカであるのも一つの特色となっている。

河畔に建つ美しい城をふくむ森と緩やかなスロープの牧草地が続く優れた環境で、1964年に3.5 ha でスタートしたが、1982年に畑や森、牧場をふくむ約10 ha の広さに拡張した。農家7棟、町家10棟、漁家1棟、水車、鍛冶屋など4棟、19世紀初期に建った小貴族の家屋敷などが集められた。

農家は厚い石積壁で、草葺屋根が大半を占めている。漁家はシャノン湾口南側に注ぐCashen川の鮭をとる漁師の家で、切妻草葺屋根、石壁で、2室の古い型式。山地の農家はLimerickや北Kerryの丘陵地帯の小農の家で、中央に炉のある広い台所兼居間と、両側に寝室のある3室形式である。炉では泥炭を燃料に荒びき小麦のパンを焼いている。民具類は質素だが、使っていたままの状態にしてある。床の敷石はLimerick西部のものだが、19世紀頃の習慣として、新婦は持参金の一部にこの石を持ってきて、この石で新婚夫婦のために民家を補修したという[宮澤 1979: 19-23; EVANS 1976: 27-71]。

南西 Clare の民家は3室形式で、中央に炉をもつ居間兼台所と2つの寝室にも小さい炉をもっている。石壁はモルタルで固めている。草葺屋根には、網状のロープを



写真23 燃料の泥炭を運ぶ少年、背後はシャノン河口付近の漁師の家  
(バンラティ城民俗公園)



写真24 アイルランドの地方町の姿を再現した地区  
(バンラティ城民俗公園)

かぶせ、ロープは石積の間にさしこんだ棒にしっかりと縛りつけて補強し、大西洋からの冬の強い偏西風に対処している。富農の家は Limerick 南郊 Kilfnane の大きな横長草葺寄棟、石壁の民家（19世紀）で、炉のある広い台所と3寝室があり、家具調度も、この野外博物館民家の中では最も立派である。広い台所では郷土菓子づくりの実演をしている。その他鍛冶屋での作業、陶器工房での壺づくり、珍しい水平式水車による製粉などの実演展示もある。

新拡張地区に切妻スレートまたは瓦葺屋根、石壁の町家が並んで小町並を構成している。質屋、村のパブ、織物店（アイリッシュリネンなど）、印刷屋、写真屋、食料品店、民芸品店、郵便局、家具と家具職人の家が集まっている。伝統工芸の実演や販売を行い、来館者が楽しみながら19世紀頃の生きた地方町の姿を体験できるようにしている。小町並の背後は広々とした牧草地で、乳牛が飼われ、アイルランド西部に多い石垣が牧場の囲いになっている。丘のスロープに純石造りの北 clare 地方の農家、丘の上に地方の小貴族の館と付属建物があり、ここを活用して農具を中心としたコレクションの展示を行い、農業技術の進歩をあとづけることができるようにしている。公園事務所や小レストランも草葺民家を活用しており、全体の建物と調和している。現在、村の学校、農家、教会、風車、ジプシーの家馬車を再構成、あるいは移築する計画を進めている。

19世紀までの伝統的農村と地方町の庶民文化の再現をめざしており、国際空港とタイアップしたアイルランド観光の拠点として注目される。

アイルランドの地方（とくに西部）には、現在でも草葺石壁の伝統的民家が散見で

きるが、ダブリン西北方やや西海岸よりの Glencolumbkille に、0.5 ha、5 棟を集めた民俗村博物館 [Folk Village Museum Glencolumbkille] がある。野外博物館ではないが、Limerick 南西郊 Adare に数棟の草葺寄棟民家が保存され、2～3 民芸品店を開いている。いわゆる現地保存型的なものである。

### Ⅲ．ヨーロッパ野外博物館の特色——総括——

ヨーロッパの野外博物館の特色については第 1 報でも述べたが [杉本 1980: 571-573, 1985: 14-29], 今回の調査を加えて検討し、その諸特色をまとめた。なお最後に、わが国の野外博物館について、ヨーロッパとの若干の比較を試みる。

#### 1. 野外博物館の分類

##### 1.1 地理学的・民族学的分類

(1) 中央野外博物館 全国の伝統的庶民文化を通観し比較できる。各国の代表的野外博物館。スウェーデンのスカンセン、ノルウェーのオスロにあるノルウェー民俗博物館、フィンランドのヘルシンキにあるセウラサーリ、ルーマニアのブクレシュチ村落博物館、ハンガリーのセンテンドレ、オーストリアのステュービンク、オランダのアルンヘムの野外博物館などがあげられる。

(2) 大地域(多地域)野外博物館 幾つかの地域をふくんだ民俗文化地域や、州のように、比較的広い地域の民家などを集めた野外博物館である。ベルギーのフレミッシュ(フラマン)語圏を代表する Bokrijk 野外博物館、チェコスロヴァキアのスロヴァキアを代表するマルチンの野外博物館、イギリス連合王国の一つウェールズの民俗資料を集めたウェールズ民俗博物館、ルーマニアのトランシルヴァニア民俗文化を代表するクルージの野外博物館、ポーランドの南東部地域の民俗建築を集めたサノクの野外博物館、フランスの上アルザス野外博物館など事例は多い。ドイツは伝統的に各州の意識が強く、各州を代表する優秀な野外博物館をもっている。

(3) 地域野外博物館 各地方の中小の野外博物館で、北ドイツ Bad Zwischnahn にあるアンメルランドの野外博物館や上シュヴァーベン地方の Kürunbach や Wolfegg の野外博物館など、とくにドイツに事例が多い。

(4) ローカル野外博物館 ヨーロッパ各地の村や町の建築物を保存した野外博物館や、北欧に多い現地で 1 戸の民家を、そこで生活しながら夏季に公開する現地保存型 (in situ) のものなどがふくまれる。



これら野外博物館の設立についてみると、政治的・国家的背景が強く働いている。オスロのノルウェー民俗博物館は、スウェーデンのスカンセンに対抗する意識があったし、フィンランドのセウラサーリ野外博物館は、ロシアとスウェーデンからの文化的独立の表明であった。コペンハーゲンのフリーランド・ムセーは、1660年までデンマーク王国の領域であった南ユトランドやシュレスヴィヒ、スウェーデン南部からも古民家を集めているが、これも民族意識の昂揚が関連している。ソ連の各連邦共和国にある野外博物館(例えばラトヴィアのリガ、エストニアのタリン、ウクライナのキエフ)も、各共和国の歴史的民族的伝統を表示している。同様の傾向はスロヴァキアのマルチン、ベルギーのフレミッシュ文化を代表する Bokrijk、ウェールズの民俗博物館などにもみられ、それぞれ民族文化のアイデンティティを求める一種の保守的様相と密接に結びついている [CZAJKOWSKI 1984: 371-381]。西欧諸国では、現在経営面では、観光産業と結合した私企業によるものもあるが、多くは国家や州をはじめ、地方組合あるいは野外博物館を支援する協会などによって支えられている。東欧諸国やソ連など社会主義諸国では、国や地方自治体など種々のレベルの管理運営形態をとり、民族文化の保存と国家意識の昂揚など、政治的な貢献を強調する傾向がある。

## 1.2 展示テーマによる分類

(1) スカンセンに代表されるような、伝統的建造物の展示から北方系動物園、遊園地までふくんだ総合的野外博物館。

(2) 農家などを中心とした民俗建築や、村落ぐるみの復元など、伝統的農村文化に主力をおいた村落野外博物館。

(3) 地方町など都市の住居(町家)を集めて小町並を再構成した都市の町民文化の再現をめざす都市(町家)野外博物館。

(4) 農村の手工業など、伝統的技術や農村工業に主力をおいた伝統技術野外博物館。

(5) (2)、(4)と関連するが、土地の耕作、果樹栽培、牧牛など動物飼育、漁業、など生業関係の野外博物館。

(6) イギリスに多い産業革命初期の建物やその後の変化など、産業遺跡的野外博物館。

(7) 考古学に主力のある先史考古野外博物館。

一般に各種の展示テーマがかなり複合している野外博物館が多い。

初期の野外博物館は、農家など伝統的民俗建築を移築することによって、その保存を強調した建物中心の村落野外博物館的なものが多かった。いわゆるパークミュージ

アム的な性格が強い。この傾向は今日でも続いているが、1914年にデンマークのオールフスに古い町野外博物館 (Den Gamle By) が誕生した。これは職人文化と町民文化など都市の庶民生活や文化に注目し、16～19世紀の美しい地方町の町並みを再構成したものである [BRAMSEN 1971]。

この傾向は多くの野外博物館にも影響を及ぼした。フィンランド南西部ツルクに1937年に開かれた野外博物館は、その一部に1827年当時の職人街を再現しているし、スウェーデンの Linköping では、都市再開発のため、4 ha の区画に70余の古い建物がそのまま移され、19世紀の町並みを再構成した野外博物館 Gamla Linköping が誕生した。ベルゲンの古い町野外博物館 (Gamle Bergen) も都市 (町家) 野外博物館の好例である。

手工芸や農村工業など伝統技術野外博物館や、産業革命初期の産業設備を展示した産業遺跡野外博物館は、1960年代以降に増加しており、野外博物館の歴史では比較的新しい。

1964年開館したブルガリアの Gabrovo 近郊の Etera にある野外博物館は、農村の伝統技術設備 (工場) を展示し、26の工場の生産物が博物館財政の80%をカバーしている [CZAJKOWSKI 1981: 12-31] のは注目してよい。

1962年オープンしたルーマニアの Sibiu にある野外博物館は、ルーマニア全土から集めた手工芸と農村工業関係の展示が有名である。西ドイツのハーゲンにあるウェストファーレン伝統技術文化野外博物館も優秀である。産業遺跡野外博物館の代表例は1972年開館したイギリスの Ironbridge George 博物館であり、イングランド北東部のビーミッシュの北イングランド野外博物館 (1970年開館) も充実している。

フランスの Ecomusée は、現地保存型に近い野外博物館で、地域自然公園内での自然と文化財の保存が一体となったものが多い。

## 2. 野外博物館の構成要素

野外博物館を構成する要素としては、(1) 立地環境、(2) 移築復元 (レプリカを含む) 建築物～民家など、(3) 建築物内外での民具など生活用具類の展示、(4) 生活の再現、手工業などの実演展示、(5) 展示館、(6) 研究部門と展示、(7) 売店、食堂、ガイドなどサービス関係、をあげることができる。

### 2.1 展示としての立地環境 (自然環境)

野外博物館の特色は、野外に単なる建物を陳列するのではなく、生活のある博物館、生きている庶民の生活である。景観の特徴としては、自然をとりこんだパークミュー

ジウム、あるいは民俗公園（東欧諸国では民族公園と称する）の性格をもっていることである。これはスカンセンをはじめ野外博物館のパイオニアである北欧野外博物館の理念であった。

野外博物館は、環境と建物や民具などがセットになって伝統的な庶民の生活を表現するのが特色である。したがって野外博物館の立地環境、自然の利用も展示の重要な要素になるのである。

規模（敷地面積）は、小は 0.5 ha 程度のものから大は 100 ha を超えるものまで幅がある。中央野外博物館や大地域野外博物館は 30 ha 以上のものが多い。西ドイツ、デトモルトのウェストファーレン農村文化野外博物館が 80 ha、スロヴァキアのマルチンにある野外博物館も丘陵と森をふくんだ 100 ha の面積をもつ。イギリスのマン島 Cregneash にある Manx Open Air Folk Museum は Cregneash 村の一部をふくむ現地保存型 (in situ) の博物館で、広い牧草地をふくんで 100 ha に達する。地域自然公園と結びついたフランスの Ecomusée もマルケーズのように 100 ha を超えるものがみられる。

パークミュージアム的な村落野外博物館に比べると、概して都市（町家）野外博物館は規模が小さく、町並的にコンパクトにまとまっている。

展示建物の数は、ヨーロッパの大半の野外博物館では10~30棟程度だが、計画（下線）も含めて100棟以上の展示建物をもつ大規模なものは、スカンセン、オスロ、ブクレシュチ、センテンドレ、マルチン、キエフ、サノクの野外博物館などである。

立地環境は、オールフスやベルゲンなど市街地の一面にある町家の博物館などを除くと、一般に郊外の比較的交通不便な地域に位置するものが多い。しかしいずれも天然林や人工林など美しい緑地をもつ起伏のある丘陵性の地形が多く、湖畔、河畔に立地するものもあり、大変優れた自然環境である。デンマークのヤール・ヘーデ、西ドイツのキール、フランスのマルケーズのように不毛の砂丘を活用した例もある。オーストリアのステュービングや西ドイツのハーゲン、ゾーベルンハイムのように狭長な谷地形を利用した例もある。デンマークのフリーランド・ムセーのように移築建物の原地の環境を見事に復元（再構成）したものがある（例えば低湿地の農村や砂丘のさびれた漁具小屋、岩石の多い荒涼とした島など自然環境の表現）。移築建物の原地の環境復元は、部分的にせよ、多くの野外博物館で導入する傾向がみられる。

建物とそれをとりまく環境を一体として展示する努力が払われている。一般に環境に対する配慮が行き届き、地域性や民族性を重視したものが多い。自然環境と建物の配置の中に野外博物館の展示の意図が表現されているのである。

野外博物館は、特定の場所（自然環境）に建物などを移築配置するのだが、現地の村がそのまま村ぐるみ、あるいはその一部が野外博物館となった現地保存型（in situ）野外博物館がある。北欧には、村や町のコンミュンに属し、それによって支えられたり、あるいは個人の住宅を夏季に民家博物館として公開するミニ野外博物館が多いが、これらは現地型の典型である。この種の博物館は一部分だけが公式に記録されているので、正確な数を把握することは困難である [CZAJKOWSKI 1981: 12-31]。

現地保存型で著名なのは、マン島のマックス野外民俗博物館、ポーランドのホホワヴ、スロヴァキアのチチマニイなどをあげることができる。都市（町家）野外博物館にもこの型にふくまれるものが多い。フランスの Ecomusée も現地保存型の傾向が強い。

現地保存型は移築ではなく、そのままの姿で民家の生まれた土地に生きながら定着しているのだから、野外博物館の最良の型といえるかも知れない。

## 2.2 建築物～農家・町家など

野外博物館の展示の中心は建築物である。博物館によって展示建物の種類は異なるが、農家、町家、漁家など主屋と、穀倉、倉庫、家畜舎など付属建物。陶器工房、搾油小屋、製材所、製粉小屋、鍛冶屋、水車、風車など農村工業や伝統技術に関する建物。教会、十字架堂、小祠など宗教的な建物。村の小学校、徴税小屋、郵便局、消防小屋、小劇場など公共的建物。境界石、道標、村の集会広場、墓地等々、農村や都市の伝統的な生活ぶりを示すものが集められている。

とくに農家の場合は、主屋のみを展示したものもあるが、建物配置にも地域性があり、主屋と付属建物をセットにして移築復元している。

このことによって農村生活の全体をわかりやすく展示することになる。

西ドイツのデトモルトのように大型屋敷別にまとめて配置している例や、小村、広場村など集落形態を再構成したものがある（デトモルト、ヘッセンパークなど）。

村の空間配置を簡潔な形に再構成し、民俗建築の発達過程をあとづけたり、社会層を配慮した家屋や生活用具類を展示している充実した野外博物館もある。

野外博物館の大半の建物は、移築復元だが、素材の入手困難などで不可能な場合は、アイルランドのバンラティ城民俗公園のように調査資料に忠実に実物そのままのレプリカを作る例もある。

ナショナルレヴェルの中央野外博物館では、建物を全国各地から集めて、敷地内に地理的特色を考慮して地域別に配置したものが多く、大地域博物館でも、その地域性（ローカルカラー）を表現するため、その配置に留意している例が多い。

建築年代を重視し、野外博物館の建物を通じて、建築様式の発達過程を理解することが可能な例もある。北ドイツの多くの野外博物館では、有畜農耕を反映した北ドイツ特有のザクセン型やフリース型の民家をみることができ、建築構造的には15世紀からのホール型家屋の発展過程が確認できる [JOHANNSEN 1979]。イギリスのシングルトンとエイボンクロフトの野外博物館に保存された建物が中世建築と木造家屋の発展を考察する上で重要な役割を果たしている。

移築した建物には、展示解説のついているものもあるが、移築原地を図示したり、間取図を示す程度のもので、多くは家屋自体に解説パネルやラベルはない。家屋を標本化していないのである [和田 1976: 52-62]。自然と家屋と生活をセットにして、可能な限り生きた姿を展示しようとする努力が払われている。しかしガイドブックやリーフレット類には着実な資料による詳しい解説があり、観客に理解しやすいよう配慮している。

### 2.3 建物内外に展示された民具類

建物自体だけでも、農村生活の状況のある程度示すことはできるが、移築した建物（とくに民家）内外に民具など生活用具類を展示して、生活のありのままの姿を再現することは、スカンセン以来、野外博物館の展示の伝統になっている。移築民家の内外で民具などを展示する方法は各博物館によって多様だが、整理すれば、資料館的展示法と生活復元展示法の2方法になる [小坂 1974: 1-9]。資料館的展示法は、民家の各部屋の機能や生活空間の機能を考慮に入れずに民具などを（陳列ケースや整理棚を用いる）展示する方法で、収蔵庫的な展示といえる。生活復元展示法は、民家の生活機能を重視し、民具などを元来使っていた場所に配置する方法で、民家自体も民具類と一体となっているところに特色がある。民家の生活復元であり、生きた庶民の生活ぶりを表現しようとする。ヨーロッパの野外博物館では、この生活復元展示法が主流になっているといえる。

### 2.4 生活の再現、手工業などの実演

水車や風車を使った製粉や搾油、陶器、鍛冶、製紙など、手工業や伝統工芸の実演、民俗衣装をつけた人々による作業風景、民俗舞踊や年中行事の開催などは一種の動態展示になる。これらに加えて生産活動の場を再現するため、家畜の飼育や放牧、畑や果樹園を配置して農作業を行うなど、建物(民家)と生活空間を一体化し [梅棹・大貫 1978: 2-7]、生きた生活のある民家や村落、町の姿を展示しようとする努力である。

諸行事や手工業の場合、例えば北ドイツの Bad Zwischenahn の野外博物館にある

ザクセン型農家の広土間で行われているロープ作りのように係官の指導で体験できるような、あるいはスカンセンで行われている民俗舞踊や夏至祭のイブに五月柱を立てる行事のように、観客の参加できるケースもある。いわゆる「参加する博物館」である。

このように生活の再現、各種の実演展示は、野外博物館を活気づけることになったが、これをディズニーランド型と混同してはならない。娯楽的要素も無視できないが、野外博物館の場合は、全般的に生きた伝統的庶民文化の保存展示という歴史的視点が貫かれているといえる。

## 2.5 展示館

野外博物館は展示館を別に設けたり、2～3の民家を民具などの展示館にしている例がある。民家内外での民具類などの生活復元展示は、家屋単位に個別的にまとまっているが、展示館（展示場）では、民具類をはじめ諸資料を系統的に深めて展示できるし[岩井 1976: 14-20]、その地域の伝統的生活文化の全体を把握することが可能である。例えばスカンセンと北方博物館（屋内展示場）、ルーマニアのトランシルヴァニア民族（民俗）博物館と野外展示場、ノルウェーのリレハンメル民俗博物館の展示館と野外展示、ウェールズ民俗博物館の展示館と野外展示のように互いに補いあっているのである。パリの国立民芸民間伝承博物館は、フランス各地にある Ecomusée との関係では、総合展示館的な役割を果している。

## 2.6 研究部門と展示

ヨーロッパの野外博物館は、少人数だが、優秀な研究スタッフが揃い、研究部門が充実しているものが多いのも大きな特色である。内容の優れたガイドブックをもつ野外博物館は、ほとんどの場合研究部門も充実している。ポーランドのサノクのように、研究報告や広報誌の発行、野外博物館関係シンポジウムの開催など意欲的に取り組んでいる野外博物館もある。いわゆる研究と展示の一体化である。

## 2.7 管理棟、売店、食堂など

管理棟や売店、食堂なども野外博物館の重要な構成要素だが、とくにこれらが古民家など伝統的な建物を活用している例がある。この場合は、展示の一環として一層重要になってくる。

## 3. ヨーロッパ野外博物館の連帯

ヨーロッパの野外博物館は、19世紀末（1891年）にスカンセンが開館してから100

年に近くなろうとしている。とくに1950年代を軸に野外博物館は新しい方向に進んだといわれている [CZAJKOWSKI 1981: 12-31]。

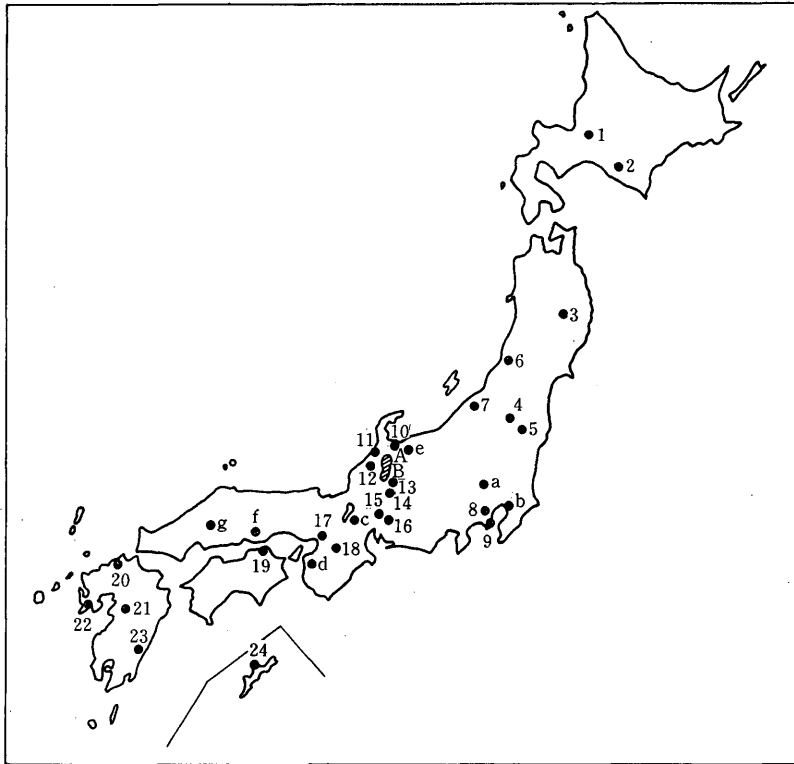
1956年のジュネーブにおける ICOM の会議で野外博物館に関する諸問題を討議する必要性がはじめて公式に示唆された。次いで1957年にデンマークとスウェーデンで会議が開かれ、野外博物館設立の科学的原理とその主な役割を明らかにした宣言がなされた。

翌1958年にはその宣言は公式なものとなり野外博物館の新しい発展の段階がはじまった。ポーランド、ルーマニア、ハンガリー、東ドイツ、ソ連、スイスその他多くの国々で、新聞や雑誌が野外博物館をとりあげはじめ、幾つかの専門のグループが野外博物館研究にとりくんだ。1966年に開かれたブクレスチの国際シンポジウムでは、野外博物館組織についての諸問題が議論された。このようにして各国の野外博物館の経験と理念の交流の必要性やその国際的な会合の重要性は、ヨーロッパ野外博物館のワーキング・グループの努力によって実現にこぎつけ、1972年ヘルシンキでヨーロッパ野外博物館連合の創立となって結実することになった [CZAJKOWSKI 1985: 19-42; ZIPPELIUS 1985: 9-18]。その後1974年はオーストリアのステューベック、1976年はスウェーデンの Härkeberga (現地保存型野外博物館)、1978年にはイギリスの Ironbridge、1980年はノルウェーのオスロ、1982年はハンガリーのセンテンドレと、2年毎に各国の野外博物館を会場としてヨーロッパの野外博物館をめぐる諸問題の討議が続けられている。とくに「野外博物館を活気づける」という重要な課題は、連合創立以来常に討議されている。野外博物館を単に娯楽中心にするのではない。科学的、教訓的、教育の目的としての野外博物館の充実とその活用法の問題である。

#### 4. 日本の野外博物館～ヨーロッパとの若干の比較～

日本の野外博物館については、すでに概況を報告したし [杉本・中村 1981; 杉本 1983]、別の機会に総括をする予定である。わが国では、現在主要な野外博物館(数棟以上移築したもの)は20以上ある(図14)。

渋沢敬三、今和次郎ら民族学や民家研究の先達がスカンセンを訪ねて深い感銘を受け、1938年に渋沢敬三らによって東京都保谷に野外博物館を設立する計画があり、その後一部民家の移築も行われた。しかし戦争のため完成しなかった。1960年に大阪府豊中市の服部緑地にできた日本民家集落博物館が最初の野外博物館となったが、スカンセンを一つのモデルとして計画を進めたといわれている。わが国の野外博物館は、スカンセンをはじめヨーロッパの野外博物館の影響をうけながら、わが国の地理的、



〈数棟以上集めたもの〉

1. 北海道開拓の村（野幌森林公園内）
2. 二風谷アイヌ文化資料館（目高、平取町）
3. みちのく民俗村（北上市）
4. 会津民俗館（福島県猪苗代町）
5. 福島市民家園（福島市）
6. 致道博物館（鶴岡市）
7. 北方文化博物館民家集落（新潟県中蒲原郡横越村）
8. 日本民家園（川崎市）
9. 三溪園（横浜市）
10. 富山市民俗民芸村（富山市）
11. 江戸村（金沢市）
12. 白山ろく民俗資料館（石川県白峰村）
13. 飛騨民俗村（高山市）
14. 下呂合掌村（岐阜県下呂町）
15. 明治村（犬山市）
16. 人間博物館リトルワールド（犬山市）
17. 日本民家集落博物館（豊中市）
18. 奈良県立民俗博物館大和民俗公園（大和郡山市）
19. 四国村（高松市）
20. 宮地嶽神社民家園（福岡県津屋崎町）
21. 菊水町民家村（熊本県菊水町）
22. グラバー園（長崎市）
23. 宮崎県総合博物館民家園（宮崎市）
24. おきなわ郷土村（沖縄県海洋博記念公園）

〈集中している地区〉

- A. 五箇山（相倉・菅沼合掌集落など）
- B. 白川郷（白川郷合掌村・荻町合掌村・荘川の里など）

〈民家を移築している風土記の丘〉

- a. さきたま風土記の丘
- b. 房総風土記の丘
- c. 近江風土記の丘
- d. 紀伊風土記の丘
- e. 立山風土記の丘
- f. 吉備路風土記の丘
- g. みよし風土記の丘

図14 日本の野外博物館の所在地分布



歴史的背景をふまえてユニークな野外博物館を作っている。中央野外博物館のようなナショナルレベルのものではなく、大地域野外博物館、地域野外博物館的なものが多い。農家を主とした村落野外博物館が多いが、北海道開拓の村、明治村、江戸村、グラバー園、風土記の丘など歴史野外博物館的な性格のものが目立っている。

立地環境をみると、北海道開拓の村は札幌郊外の野幌森林公園、豊中市の日本民家集落博物館は大阪北郊千里丘陵の緩斜面。川崎市の日本民家園は多摩川に沿う起伏に富む丘陵地形（生田緑地公園）、高山市の飛驒民俗村は松倉城跡の山麓斜面の優秀な自然環境を活用している。

愛知県犬山の間人博物館リトルワールド野外展示場は面積123万m<sup>2</sup>の丘陵地帯、2.5kmの周遊道路に沿って日本や世界諸民族の民家を付属建物もセットにして、現地の環境復元に留意しながら配置している。

現地保存型の野外博物館としては、庄川沿いの五箇山にある国指定史跡の菅沼合掌集落と相倉合掌集落が代表例である。合掌造り民家がよく残っており、現地で村ぐるみ保存されている。伝統的街区保存をめざす「重要伝統的建造物群保存地区」も一種の現地保存型の生きている野外博物館とみてよいであろう。

わが国の野外博物館も大半は移築復元だが、世界の諸地域の民家を展示するリトルワールド野外展示場の場合、現地素材の関係や運搬の困難さなどもあり、現地のままの姿や構造で復元が難しいケースもある。地震、台風対策など日本の風土にあわせて補強復元している建物もある。

わが国でも生活復元展示が主力となっている。例えば川崎市の日本民家園の場合、ワラ仕事などの実演と参加や、テーマ展示的な正月行事など年中行事をとり入れ、伝統的な農村生活の雰囲気を出そうとしているし、高山市の飛驒民俗村では、一刀彫、木地、染色、塗物など伝統工芸の保存と展示。飛驒と佐渡に残っている車田田植の古い手法の保存や実演、年中行事、民俗芸能などによって飛驒農山村の伝統的な生活ぶりをみせようとしている。

わが国では、1960年代から建築史学による復元編年調査研究の普及によって、民家研究は飛躍的に発展した。野外博物館でも、日本民家園をはじめ、復元編年を基礎とした復元家屋の展示が多くなっている。しかしこの場合でも復元家屋の構造の理解に支障のないような形で生活用具類の展示を行っており、建築構造を生かしながら生活のある展示を目ざしている。

わが国では、近年文化財保存への関心や民俗文化への関心の高まりから、野外博物館の来館者も増加の傾向がみえはじめている。しかし著名観光地や都市近郊の遊覧地

などと結びついた2～3の野外博物館を除いて、一般に地味な存在であり、観客動員力が弱く、経営状況は停滞気味である。

日本に比べるとヨーロッパでは、中央、地方を問わず人々がよく野外博物館を利用している。再三指摘したが [杉本 1983]、ヨーロッパでは代々使ってきた相続的な家具調度を、日常生活の中にとりいれているケースが多い。したがって日常生活と博物館の展示品との間に歴史的な連続性のようなものがあるといえる [河岡, 坪井, 杉本 1974: 1-31]。この辺りが、日本人とヨーロッパの人々の博物館に対する考え方の根本的な相異の要因と思われる。

日本の野外博物館については、筆者の作成した資料によって Czajkowski 博士がヨーロッパ野外博物館関係の文献に紹介している [CZAJKOWSKI 1980: 129-132]。わが国の野外博物館も、ヨーロッパや北アメリカその他世界諸地域の野外博物館との比較研究を通じて、その充実をめざす必要がある。

## 謝 辞

今回の調査では、各博物館で快く御協力頂いたが、とくにブクレシュチ村落博物館の J. Negoită 館長、トランシルヴァニア民族博物館の T. Graur 館長、ハンガリー国立民族博物館の T. Hoffmann 館長、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州立野外博物館の C. I. Johannsen 館長、パンラティ城民俗公園の J. Harrison 氏には大変お世話になった。また次の諸氏にも種々御教示や御指導を頂いた。

ポーランド、サノク民俗建築博物館の J. Czajkowski 先生、スイス連邦工科大学の G. Domenig 氏、駒沢大学の小川徹先生、東洋大学の太田邦夫氏、東京大学の内田祥哉先生をはじめ東欧木造建築研修会の諸氏。学習院女子短期大学の関根康正氏、国立民族学博物館の和田祐一先生。各氏に対し厚く御礼申し上げます。

## 文 献

- BEDAL, K.  
1982 *Häuser aus Franken*. Fränkisches Freilichtmuseum, Bad Windsheim.
- BIDART, P and G. COLLOMB  
1984 *Pays aquitains*. L'architecture rurale française 18, Paris: Berger Levrault.
- BRAMSEN, B.  
1971 *The Old Town Museum in Århus*. Aarhus Oliefabrik A/S on 14th September 1971 to mark the centenary of the company's foundation.
- BREIDER, T.  
1981 *Führer durch das Mühlenhof-Freilichtmuseum Münster*. Aschendorff Münster.
- BUCHMULLER, K.  
1982 *Das Bauernhaus in Oberschwaben*. Stuttgart: Wolfegger Reihe.

- CZAJKOWSKI, J.  
 1980 Muzealnictwo Skansenowskie W Japonii. *acta scansenologica* 1: 129-132, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.  
 1981 An Outline of Skansen Museology in Europe. *Open-Air Museums in Poland*: 12-31, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.  
 1984 MUZEA NA WOLNYM POWIETRZU W EUROPIE. Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.  
 1985 10 Years of the Association of European Open Air Museum. *acta scansenologica* 3: 19-42, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.
- CZAJKOWSKI, J and H. OLSZAŃSKI  
 1981 The Museum of Folk Architecture in Sanok. *Open-Air Museum in Poland*: 94-116 Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.
- ERNST, E.  
 1980 *Freilichtmuseum Hessenpark*. H. Kunz.
- EVANS, E. E.  
 1976 *Irish Folk Ways*. London: Routledge & Kegan Paul.
- GOTTMANN, J.  
 1951 *A Geography of Europe*. London: George G. Harrap.
- GSCHWEND, M.  
 1971 *Schweizer Bauernhäuser*. Bern: Paul Haupt.
- GSCHWEND, M., P. FEHLMANN and R. HUNZIKER  
 1982 *Das Schweizerische Freilichtmuseum*. AT Verlag.
- HINTEN, W  
 1985 About Conceptions of Ecomuseum in France. *acta scansenologica* 3: 43-64.
- 岩井宏実  
 1976 「地方民俗博物館の問題点」『日本民俗学』106: 14-20。
- JOHANNSEN, I.  
 1979 *Das Niederdeutsche Hallenhaus und Seine Nebengebäude im Landkreis Lüchow-Dannenberg*. Hannover: Landbuch Verlag.
- KAMPHAUSEN, A.  
 1970 *Das Schleswig-Holsteinische Freilichtmuseum. Häuser und Häusgeschichten*. Neumünster: Karl Wachholtz Verlag.
- 河岡武春・坪井洋文・杉本尚次  
 1974 「座談会, ヨーロッパの民俗・民族学博物館」『民具マンスリー』6(10-11): 1-31。
- 川島宙次  
 1985 「チェコスロヴァキアの民家」(1)(2)『新住宅』4(2):67-72, 4(3): 61-66。
- KECSKÉS, P. (ed.)  
 1980 *Upper Tisza Region*. Szentendre.
- 小坂広志  
 1974 「民家博物館における民具の展示法について——日本民家園の例——」『民具マンスリー』7(4): 1-9。
- KURZĄTKOWSKI, M.  
 1981 "Pueblo Español" in Barcelona and Some Remarks Concerning Quasi-Skansens. *acta scansenologica* 2: 161-170, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.
- MENCL, V.  
 1980 *Lidová Architektura V Československu*. Praha.
- MICHELSEN, P.  
 1966 The Origin and Aim of the Open-Air Museum. In H. Rasmussen (ed.), *Dansk Folkemuseum and Frilandsmuseet, Nationalmuseet*, pp. 227-243.
- MIDURA, F.  
 1981 Skansen Museology in Poland. *Open-Air Museums in Poland*: 32-55, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.

杉本 ヨーロッパの野外博物館

宮崎玲子

1984 「ハンガリーの民家」『民俗建築』85: 42-58。

宮澤智士

1979 「アイルランド民家紀行——1977——」『水煙会』1: 19-24。

NEGOIȚĂ, J. (ed)

1983 *The Village and Folk Art Museum Bucharest-Romania*. Bucuresti.

野村雅一

1979 「ルーマニアの村から」『月刊みんぱく』3(7): 15-17。

太田邦夫

1980 「校倉の住まい ポーランド、ポドハレ地方の伝統的民家」『季刊民族学』13: 66-73。

1985 『ヨーロッパの木造建築』講談社。

太田邦夫・浅井賢治 (他)

1977 「住居における木造架構の比較研究 (1)」『住宅建築研究所報』7612: 189-203。

1978 「住居における木造架構の比較研究 (2)」『住宅建築研究所報』7702: 13-22。

1982 「住居における木造架構の比較研究 (3)」『住宅建築研究所報』8102: 71-86。

1983 「住居における木造架構の比較研究 (4)」『住宅建築研究所報』8215: 279-298。

岡崎 晋・杉本尚次 (編)

1978 『スウェーデン・デンマーク野外歴史博物館』講談社。

ジャック・プズー

1982 『フランスの風土と生活』柏岡珠子訳 三修社。

SANDSTEDE, H.

1984 *Führer Druch Das Ammerländer Bauernhaus*. Verein für Heimatpflege in Bad Zwischenahn.

SANOK FOLK ARCHITECTURE MUSEUM

1978 *International Skansen Conference*. Sanok 27-30 May, 1978. Papers (summary), Sanok.

佐々木高明

1973 「ヨーロッパの主要民族学博物館——その実地調査報告——」『学術月報』27 (10): 16-33。

SCHILLI, H.

1978 *Schwarzwaldhäuser*. Karlsruhe: Badenia.

杉本尚次

1969 『日本民家の研究——その地理学的考察——』ミネルヴァ書房。

1977 「市民のふるさと スカンセン」『季刊民族学』1: 96-100。

1980 「ヨーロッパ民家の民族学的・地理学的研究」『国立民族学博物館研究報告』5 (2): 493-592。

1983 『日本民家の旅』日本放送出版協会。

1985a 「野外博物館の展示——ヨーロッパの事例を中心に——」『展示学』2: 14-29。

1985b 「東ヨーロッパ民家の旅」『季刊民族学』32: 86-93。

杉本尚次・中村たかを (編)

1981 『民家と民具、ふるさとの博物館』講談社。

梅棹忠夫・大貫良夫

1978 「館長対談 野外博物館のビジョン」『月刊みんぱく』2 (10): 2-7。

和田正洲

1976 「民俗学博物館論」『日本民俗学』106: 52-62。

WEISS, R.

1973 *Häuser und Landschaften der Schweiz*. Zürich: Eugen Rentsch.

WORYTKIEWICZ, P.

1981 “Pueblo Español” in Barcelona. *acta scansenologica* 2: 171-185, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.

山崎 弘

1975 「スペイン村の紹介」『民俗建築』69: 84-91。

ZIPPELIUS, A.

1974 *Handbuch der europäischen Freilichtmuseen*. Bonn: Rudolf Habelt.

1985 25 Years of the ICOM Declaratkion about Open Air Museums—An attempt stock-taking—. *acta scansenologica* 3: 9-18, Muzeum Budownictwa Ludowego W Sanoku.